

校定
平家物語百二十句本

高
橋
貞
一

平家卷第六

二八〇

にう道ないしはらのひめみやほうわう

にたてまつらるゝ事

第五十一句

たかくらのみんほうぎよ……………

二八二

なんとのそうがうげくはんの事

はつねのそうじやうのさた

しやうくはう御なう

ちうけんほういんのうた

第五十二句

もみちのまき……………

二八四

もみちの山のさた

こうえうをもつてさけあたゝむる事

女ばうのしやうぞくうばひとらるゝ事

あたらしきしやうぞく給る事

第五十三句

あふひのねうご……………

二八七

あふひのまへりうがんしせきの事

あふひのねうごしきよ

こがうどのゝ事

第五十四句

よしなかむほん……………

二九六

よしなかゆうせうの事

じやうの太郎じゆりやう

いしかはじやうらくきよ

うさの大ぐうじひきやく

第五十五句

にう道しきよ……………

二九九

にうだうやまひの事

二ゐ殿あくむの事

しゆぎやうの人からめとらるゝ事

ひやうごのつきじま

第五十六句

ぎをんのねうご……………

三〇三

たゞもりしのび御かうぐぶの事

たゞもりぎをんのねうごくださるゝ事

きいの國いとか山うたの事

わかぎみしそくにさだまる事

じゝんばうゑんまのちやうくつじやう

りうしやそうれいの事

第五十七句

くにつなしきよ……………

三二三

くにつな四でうのだいりしうまうのと

きこしかゝるゝ事

くにつなにんちやうのしやうぞくとり

いださるゝ事

じよむそうづゑぼしとりいださるゝ事

くにつなさうごのし申さるゝ事

第五十八句

すのまたがは……………

三二六

ほうわうくはんぎよ

大ぶつでんことはじめ

みのゝ國もくだいみやこへちうしんの

事

第五十九句

じやうの太郎とんし……………

三一九

げんじかつせんにりをうしなふ事

大しや

平家しよぐはんふじやうじゆの事

中ぐうけんれいもんゐんのゐんがう

たいはくせいのかた

第六十句

じやうの四郎くはんと……………

三二二

じやうの四郎しなのゝ國はつかう

井のうへの九郎ぶりやくの事

じやうの四郎いくさにりをうしなふ事

京中の平家ゆだんの事

平家卷第六

たかくらのめん ほうぎよ

おしう五年正月一日、だいらにはとうごくのひやうかく、なんどのくはさいによつて、しゆじやうしゆつぎよもなし。ものゝをとふきならさず、ふがくもそうせず、とうじのくぎやう一人もまいられず。うぢでらしうしつによつてなり。二日てんじやうのあんすいもなし。よし野のくずもまいらず、なんにようちむせびて、きん中いましくぞ見えける。ぶつほうわうはうともにつきぬる事ぞあさましき。ほうわう仰なりけるは、しだいのていわうおもへばこなりまごなり。いかなればせいむをとゞめられて、とし月をゝくるらんとぞ御なげきありける。

こうじやう―公請を停止し。
もつしゆ―没収。

五日なんとのそうがうとう、げくはんせられ、こうじやうちやうじし、しよしよくをもつしゆせらる。しゆとはおひたるもわかきも、あるひはいころされ、あるひはきりころされ、ほのうちのいでず、けふりにむせび、おほくほろびしかば、わづかにのこるともがらは、山はやしにまじはつて、あとをとゞむるは一人もなし。こうぶくじのべつたうけりんぬんのそうじやうゑいえんは、ぶつざうきやうくはんのけふりとのぼるを見給ひて、あなあさましと心をくだかれけるよりやまひつゐて、うちふし給ひしかば、いくほどなくして、つゐにはかなく成給ひぬ。此そうじやうは、ゆうにやさしき人にておはしけり。あるときほとゝぎすのなくをきひて、

きくたびにめづらしければほとゝぎすいつもはつねの心ちこそすれ

といふたをよみ給ひて、はつねのそう正とぞいはれ給ひける。たゞしかたのごとくも御さい
あるべきとて、そうみやうのさたありしに、なんとそのうがうはげくはんせられぬ。ほつき
やうのそうがうをもつておこなはるべきかとくぎやうせんぎありしかども、さればとてなんと
をすてはてさせ給ふべきならねば、三ろんじうのがくしやう、じやうほういかうとて、くはん
じゆじにしのびつゝかくれめたりけるを、めしだされて、御さいゑかたのごとくとりおこなは
る。しやうくはうは、きよ／＼ねんほうわうのとばどのにをしこめられさせ給ひし御事、たか
くらのみやのうたれさせ給ひし御ありさま、みやこうつしとてあさましかりし天がのみだれ、
かやうの御事ども心ぐるしふおぼしめしけるより、御なうつかせ給ひて、つねは御わづらはしく
きこえさせ給ひしが、とう大じこうぶくじのほろびぬるよしきこしめしてよりは、御なういよ
／＼おもらせ給ふ。ほうわうなのめならず御なげき給ひしほどに、同正月十四日、六はらのい
けどのにて、しんぬんつゐにほうぎよなりぬ。御う十二ねんとくせいせんばんたん、ししよじ
んぎのすたれぬるみちをおこし、りせいあんらくのたえたるあとをつぎ給ふ。三みやう六つう
のらかんもまぬかれ給はず、げんじゆつへんげのごんじやものがれぬみちなれば、うゑむじや
うのならひなれば、ことはりすぎてぞおぼえける。やがてその夜ひがし山のせいかんじへうつ
したてまつり、ゆふべのけふりとたぐへて、春のかすみとのぼらせ給ふ。ちうけんほういん御
さうそうにまいりあはんとて、いそぎ山よりくだられけるが、はやむなしきけふりとならせ給

ちうけん／＼遊志。
卷一 額打論にも出る

ふを見たてまつりて、

つねに見し君がみゆきをけふとへばかへらぬたびときくぞかなしき

又ある女ばうきみかくれさせ給ひぬときゝて、かうぞおもひつゞける。

くものうへにゆくすゑとをく見し月のひかりきゑぬときくぞかなしき

御とし廿一、うちには十かいをたち、ほかには五じやうをみだらず、れいぎをたゞしふせさせ給ひけり。まつだいのけんわうにてましゝければ、よのおしみたてまつる事、月日のひかりをうしなへるがごとし。かやうに人のねがひもかなはず、たみのくはほうもつたなきにんげんのさかひこそかなしけれ。

もみちのまき

ゆうにやさしふ人のおもひつきたてまつる事、をそらくはゑんぎ天りやくのみかどゝ申とも、いかでかまさらせ給ふべきとぞ申ける。大かたはけんわうのなをあげ、じんとくをなをほどこさせまします事も、きみ御せいじんのゝち、せいぢよくをわかたせ給ひてのうへの事にこそあるに、此きみむげにゆうしゆの御ときより、しやうをにうわにたもたせまします。

さんぬるじうわのころほひ、御ざいぬのはじめつかた、御としいまだ十さいばかりにもやならせましゝけん、あまりにこうえうをあいせさせ給ひて、きたのちんにこ山をつかせ、はじやかえで、いろいろつくしくもみぢしたるをうえさせて、もみちの山となづけて、ひめむすにゑい

らんあるに、なをあきたらせ給はず。しかるをある夜のあらしはげしふふひて、こうえうみなふきちらし、らくえうすこぶるらうぜきなり。どのもりのとものみやつこあさぎよめすとて、これをことぐくはきすてけり。のこるえだ、ちれるこのはをかきあつめて、風すさまじかりけるあしたなれば、ぬゐ(どの)のちんにして、さけあたゝめてたべけるたきぐにこそはしてんげれ。ぶぎやうのくらんどぎやうがうよりさきにいそぎゆきて見るに、あとかたなし。いかにとどふに、しかくどこたふ。あなあさまし、さしもきみのしつしおぼしめされつるこうえうを、かやうにしける事の心うさよ。しらずなんちら、きんごくるざいにもよび、わがみもいかなるげきりんにかあづからんずらむなど申けるところに、しゆじやういとゞしくよるのおとゞをいでさせ給ひもあえず、かしこにぎやうがうなつて、こうえうをゑいらんあるに、なかりければ、いかにと御たづねありき。なりたゞ何とそうすべきむねもなふして、ありのまゝにそうもんす。天きことに御心よげにうちゑませ給ひて、りんかんにさけをあたゝめてこうえうをたくといふしの心をば、さればそれらにはたれがをしえけるぞや、やさしふもつかまつりける物かなとて、かへつてゑいかににあづかるうへはあへてちよくかななかりけり。又さんぬるあんげんのころおひ、御かたがへのぎやうがうのありしとき、さらでだにけいじんあかつきをとなふるこゑ、めいわうのねぶりをおどろかすほどにもなりしかば、いつも御ねざめがちにて、つやぐ御しんもならざりけり。いはんや、ふゆの夜のゆきふりさえたるには、ゑんぎのせいだいこくどのたみどもがいかにさぶかるらんと、よるのおとゞにして、ぎよいをぬがせ給ひけ

る御事までもおぼしめしいで、わがていとくのいたらぬ事をぞ御なげきありける。やゝしんかうにをよんで、ほどとをく人のさけぶこゑしけり。ぐぶの人々はきゝもつけられざりけれども、しゆじやうはきこしめして、いまさけぶはなにものぞ、見てまいれと仰ければ、うへぶししたるてん上人、じやうにちのものにおほするに、そのへんをはしりめぐりてたづねぬれば、あるつじに、あやしのをんなわらはべの、ながもちのふたさげてなくにてぞある。いかにとどふに、しうの女ばうの、あんの御しよにさぶらはせ給ふが、此ほどやうくにしてしたてられたる御しやうぞくをもちてまいるほどに、たゞいまおとこ三人まうできて、うばひとりてまかりぬるぞや。いまはしやうぞくがさぶらはばこそ、御しよにもさぶらはせ給はめ、又はかゝしふたちやどらせ給ふべきしたしひ御かたも候はねば、これをあんじつくるになくなりとぞ申ける。をんなわらはをぐしてまいりつゝ、此やうをそうもんす。しゆじやうはきこしめし、あなむざんや、なにもものゝのしわざにてかあらんとて、りうがんより御なみだをながさせ給ふぞかたじけなき。ぎうのたまはぎうの心のすなをなるをもつて心とせり。かるがゆへにみなすなをなり。いまのよのたまは、ちんが心をもつて心とするゆへに、かだましきものでうにあつてつみをおかす。これわがはちにあらずやとぞ御なげきありける。さてとられつるきぬはなにいろぞと御たづねありければ、しかゝかと申。けんれいもんあん、そのころ中ぐうにてましゝけるとき、その御かたへさやうのいろしたるぎよいや候と御たづねありければ、さきのよりはるかにいつくしきがまいりたりけるを、くだんのをんなわらはにぞたばせける。いま

だ夜ふかし。又もさるめにもやあはんとて、じやうにちのものにつけて、しうの女ばうのつばねまでをくらせ給ふぞかたじけなき。さればあやしのしづのお、しづのめにいたまで、たゞ此君せんしうばんぜいのほうさんをいのりたてまつるに、わづかに廿一にてほうぎよなるこそかなしけれ。

あふひのねうご

ゆうゑいー謡歌。

中にもあはれなりし御事は、中ぐうの御かたにさぶらはれける女ばうのめしつかはれけるをんなわらは、おもひのほかになりうがんにしせきする事あり。たゞよのつねにあらさまなる御事にてもなく、よなくこれをぞめされける。まめやかなりし御心ざしふかゝりければ、しうの女ばうもめしつかはず、かへりてしうのごとくにぞかしづきける。そのかみゆうゑいにいへる事あり。をんなをうみても、ひさんする事なかれ、おのこをうみても、きくはんする事なかれ。おとこはこうにだにもほうぜられず、をんなはひたるゆへに、きさきにたてるといへり。此人ねうごきさきこくばせんゐんともあふがれなんす。めでたかりけるさひはひかな。そのなをあふひのまへといひければ、人ないくはあふひのねうごなんぞ申ける。しゆじやうは此よしをきこしめして、そのゝちはめされざりけり。御心ざしのつきたるにはあらねども、世のそしりをはゞからせ給ふによつてなり。しゆじやうつねは御ながめがちにて、よるのおとゞにのみぞいらせ給ふ。そのときのせつろく、まつどの、されば心ぐるしき事にこそあらんなれ。

御なぐさめたてまつらんとて、いそぎ御さんだいあつて、さやうにゑいりよにかけさせまし
さん御事を、なんでもうしさいか候べき。くだんの女ばう、とくくめさるべしとおぼえ候。
ぞくしやうをたづぬるにをよばず。もとふさやがてゆうしにし候はんとそうせさせ給へば、
しゆじやうきこしめして、いざとよ。そこに申事はさる事なれども、くらゐをしりぞひてのち
は、まゝさるためしもあんなり。まさしふざいものとき、さやうの事はこうだいのそしりなる
べしとて、きこしめしもいれざりけり。まつどのちからをよびたまはず。御なみだををさへて
御たいしゆつあり。そのゝちしゆじやう、なにとなく御てならひのつゐでにおぼしめしなさ
れけるあひだ、みどりのうすやうのにほひことにふかゝりけるに、ふるきうたなれども、おぼ
しめしだいしてあそばしけり。

しのぶれどいろにいでにけりわがこひはものやおもふと人のとふまで

此てならひを、れいぜいのせうしやうたかふさ御心しりの人にて、これをとつて、くだんのあふ
ひのまへに給はらせければ、かほうちあかめ、れいならぬこゝちいできたりとて、さとへかへり
うちふす事五六日にして、つゐにはかなくなりけり。きみが一日のおんのために、しうがはく
ねんの身をほろぼすとも、かやうの事をや申べき。むかしたうのたいそう、ていじんきがむす
めをげんわでんにいれんとし給ひしを、ぎてう、かのむすめは、すでにりくしにやくせりとい
さめ申せしかば、でんにいれらるゝ事をやめらるゝには、すこしもたがはせ給はず。しゆじや
うれんばの御おもひにしづませ給ふを、中ぐうの御かたよりなくさめまいらせんとて、こがう

どのと申女ばうをまいらせらる。さくらまちの中なごんなりのりのきやうの御むすめ、れいぜいの大なごんたかふさのきやうのいまだせうしやうなりしとき、見そめたりし女ばうなり。せうしやうはじめはうたをよみ、文をつくし、おほくのとし月をこひかなしみ給ひしかども、なびくけしきもなかりしが、さすがになさけによはる心にや、つめにはなびき給ひけり。せうしやうわりなくおもはれけるが、いくほどなかりしに、いまは又きみにめされまいらせて、せんかたなくかなしくて、あかぬわかれのなみだには、そでしほたれてほしあへず。よそながらもこがうどのをいま一ど見たてまつる事もやと、その事となふつねにさんだいせられけり。あるときおはしけるつぼねのへん、みすのあたりをたゝずみありき給へども、こがうどの、われきみへめされしうへは、せうしやういかにいふども、ことばをかはし、文をも見るべきならずとて、つら／＼なさけをだにかけ給はず。せうしやうせめてのおもひのあまりに、一しゆのうたをかきて、此女ばうのおはしけるみすのうちへぞなげ入たる。

おもひかね心はそらにみちのくのちかのしほがましかきかひなし

女ばうもうたのかへり事せばやとおもはれけるが、それもきみの御ため御うしろめたふやおもはれけん、てにだにとつて見給はず。うへわらはにとらせて、つぼのうちへぞなげいだす。せうしやうなさけなくうらめしふおもはれけれども、人もこそ見れとそらおそろしさに、いそぎとつてふところにいれ、なみだををさへていでられけるが、なをたちかへり、たまづさをいまはてにだにとらじとやさこそころにおもひすつらん

あふて―おもはれけれ
―第一本、なし。

いまは此世にてあひ見ん事もかたければ、いきてひまなくものをおもはんより、たゞしななどのみぞねがはれける。あふてあはざるうらみもあり、あはておもひふかきこひもあり、あはておもふこひよりも、あふてあはざるうらみこそ、せんかたなふはおもはれけれ。大じやうにう道、此よしをつたへきゝ給ひて、御ひめは中ぐうにてだいいへわたらせ給ふ。れむぜいのせうしやうのきたのかたもおなじく御むすめなり。此こがうどの一かたならずかやうにありしあひだ、大じやうにうだう、いやゝゝ此こがうがあらんほどは、此世の中あしかりなんす。こがうをん中をめしいださばやとぞの給ひける。こがうどの、此よしをきゝ給ひて、わがみの事はいかにもありなん、君の御ため心ぐるしかるべきと、だいをひそかににげいでゝ、いづくともなくきうせ給ひぬ。しゆじやう御なげきなめならず、ひるはよるのおとゞにのみいらせおはしまして、御なみだにむせびおはします。よるはなんでんにしゆつぎよなつて、月を御らんじてぞなぐさませましゝける。にう道しやうこく、此よしをつたへきゝ、君はこがうがゆへにおもひしづませ給ひたんなり。さらんにとつてはとて、御かいしやくの女ばうたちをもつけたてまつらず。さんだいし給ふしんかをもそねみ給へば、にう道のけんゐにはゞかつて、まいりかよふ人もなし。きん中いまゝしふぞなりにける。さるほどに八月十日あまりにもなりにけり。しゆじやうさしもくまなきそらなれど、御なみだにくもりつゝ、月のひかりもさやかならず、夜ふけ人しづまりて、しゆじやうなんでんへしゆつぎよなつて、人やあるゝとおほせられければ、共、御いらへ申人もなし。やゝあつてだんじやうの大ひつ、そのころくらんどにて候けるが、

その夜しも御とのいして、はるかにとをく候が、中くにといらへ申たりければ、ちかふまいれ、おほせあはすべき事あり。何事やらんとおもひて、御せんちかふまいりたれば、なんぢはもしこがうがゆくゑやしりたるとおほせければ、なかくに、いかでかしりまいらせ候べきと申せば、しゆじやう、まことやらん、こがうはさがのほとり、かたおりどかやしたんなるうちにありと申ものゝあるぞとよ。あるじがなをばしらずとも、たづねてまいらせてんやとおほせければ、なかくに、あるじがなをしり候はでは、いかでかたづねまいらせ候べき(と)申ければ、しゆじやう、げにもとて、りうがんより御なみだをながさせ給ふ。中くにつくゞ物をあんずるに、まことやこがうどのは、ことひき給ふ人ぞかし。此月のあかさに、君の御事おもひでまいらせ給ひて、ことひき給はぬ事はよもあらじ。だいにてことひき給ひしときは、中くにふゑのやうにめされしかば、そのことのねはいづくなりともきゝしらんす物を。さがのざいけいくほどがあるべき。うちまはつてたづねむに、なかきゝいださるべきとおもひければ、もしやとたづねまいらせて見候はん。たゞしたづねあひまいらせて候共、御しよなんどをたまはらでは、うはのそらとやおぼしめされ候はんずらむ。御しよをたまはつて、まいり候はんと申ければ、げにもとて御しよをあそばしてたびにけり。やがてれうの御むまにのりてゆけどぞおほせける。なかくにれうの御むま給はつて、めい月にむちをあげ、そこもしらずぞあこがれゆく。おじかなく此山ざとゝゑいじけん、さがのあたりの秋のころ、さこそはあはれにもおもひけめ。かたおりどしたるゑを見つけては、此うちにもやおはすらんと、ひかへゝきゝけ

わうぢー王地。

れ共、ことひとところもなかりけり。みだうなんどへまいり給へる事もやと、しやかだうをはじめて、だうぐを見まはれども、こがうのどのにたる女ばうだにもなかりけり。だいをばたのもしげに申ていでぬ。此女ばうだにはいまだたづねもあはず、むなしふかへりまいりたらば、中ぐまいらざらんよりもあしかるべし。これよりいづちへもゆかばやとおもへども、いづくかわうちならざらん。身をかくすべきやどりもなし。いかにせんずるとおもひけるが、まことやほうりんじはほどちかきところなれば、もし月のひかりにさそはれて、まいり給へる事もやと、そなたへむひてぞあゆませゆく。かめ山のあたりちかく、まつの一むらあるかたに、かすかにことぞきこえける。みねのあらしか、まつ風か、たづぬる人のことのねか、おぼつかなくはおもへども、こまをはやめてゆくほどに、かたおりどしたるうちに、ことをぞひきすすまなける。しばしひかへてきければ、まがふべふもなき、こがうのどのゝつまをとなり。かくはなにぞとききければ、おつとをおもひてこふとよむ、さうふれんといふがく也。いとをしやがくこそおほき中に、きみの御事をおもひいでまいらせ給ひて、此がくをひき給ふ事よとおもひて、むまよりとんでおり、かどをほどゝとたゝきければ、ことははやひきやみ、かうじやうに、これはだよりより中くにが御つかひにまいりて候とて、たゝけどもとがむる人もなかりけり。やゝあつて、うちより人のいづるをとしけり。あはやとうれしふおもひてまつほどに、じやうをはづし、かどをほそめにあげ、いたいけしたるこ女ばうの、かほばかりさしだいし、これはさやうにだよりより御つかひなんど給るべきところにてもさぶらはず、かどたがひにて

ぞさぶらふらんといひければ、中くに、なか／＼返事をせば、かどたてられ、じやうさゝれてはかなはじとおもひて、ぜひなくをしあけてぞいりにける。つまどのきはのゑんにかしこまつて、いかにかやうの所には御わたり候やらん。きみは御ゆへにおぼしめししづませ給ひて、御いのちもすでにあやうくこそ見えさせおはしまし候へ。かやうに申ば、たゞうはのそらとやおぼしめされ候らん。御しよを給りてまいりて候とて、とりいだしたてまつる。こ女ばうとりつゝめで、こがうのとのにこそまいらせけれ。これをあけて見給ふに、まことにきみの御しよなりけるあひだ、やがて御返事かひて、ひきむすび、女ばうのしやうぞく一かさねそへていだされたり。中くに女ばうのしやうぞくをばかたにうちかけ申けるは、よの御つかひなんどにて候はんには、御返事のうへはとかう申べきやう候はねども、だいに御ことあそばされ候しとき、つねはふゑのやくにめされまいらせしほうこう、いかでかわすれさせ給ふべき。ちきの御かへり事うけ給はらずして、かへりまいらん事くちおしふ候と申ければ、こがうのとのげにもとやおもはれけん、みづからかへり事し給ひけり。そこにもきかせ給ひつらん、にう道あまりにおそろしき事をのみ申ときゝしかば、あさましさに、あるくれほどに、だいをばひそかにまぎれいでゝ、此ほどはかやうの所にすみ候へば、ことなんどひく事もなかりつるに、さてしもあるべき事ならねば、あすよりは太はらのおくにおもひたつ事のさぶらへば、あるじの女ばう、こよひばかりのなごりをおしみて、いまは夜もふけぬ。たちきく人もあらじなんどしきりにすゝむるあひだ、さぞなむかしのなごりもさすがゆかしくて、てなれしことをひくほどに、

馬きうのしやうーはね
馬のしやうじ。

やすくきゝいだされけりなどて、なみだせきあへ給はねば、中くにもそでをぞしほりける。やゝありてなかくになみだををきへ申けるは、あすよりは大はらのおくにおぼしめしたつ事と候は、御さまなどかへらるべきにこそ。ゆめゝあるべふも候はず。君の御なげきをばさればなにかしまいらせ給ふべき。こればしいだしまいらすなどて、ともにぐしたりけるめぶきちじやうなんといふものをとどめをき、その夜はしゆごさせ、わがみはれうの御むまにうちり、だいいりへかへりまいりたりければ、夜はほのゝとあけにけり。中くに、れうの御むまつながせ、女ばうのしやうぞくを馬きうのしやう(じ)にかけ、いまは御しんもなりぬらん、たれしか申入べきとおもひて、なんでんのかたへまいるほどに、しゆじやうはいまだゆふべの御ざにぞましゝける。みなみにかけりきたにむかひ、かんうんはなをあきのかりにつけがたし、ひんがしにいでにしながら、せんばうをたゞあかつきの月によせあたふと、心ぼそげにうちながめさせ給ふところに、中くにつんとまいり、こがうのどのの御返事とりいだしてたてまつる。君なのめならず御かんあつて、なんぢらさら(ば)ゆふさりやがてぐしてまいれとぞおほせける。にう道しやうこくのかへりきゝ給はん事はおそろしけれども、これ又りんげんなれば、ちからをよばず。さうしき、うしかひ、うしぐるまをきよげにさたし、さがへゆきむかひ、御むかひにまいりて候と申ければ、こがうまいるまじきよししきりにの給へども、とかくこしらへてくるまにとりのせたてまつり、だいいりへかへりまいりたりければ、かすかなるところにしのばせて、よなゝめされけるほどに、ひめみや一人いできさせ給ひぬ。ばうもんのねうみ

んの御事なり。にう道しやうこく、いかゞしたりけん、此よしをつたへき、給ひて、きみこがうをうしなひ給ひたりといふ事は、あとかたもなきそらごとにてありけり。そのぎならばとつねはの給ひけるが、こがうのとのをたばかりいだして、あまにぞなされける。しゆつけは日ごろよりおもひまふけたるみちなれども、心ならずあまになされて、とし廿三にて、こきすみぞめにやつれつゝ、さがのへんにぞすまれける。しゆじやうは、かやうの事どもを、御心ぐるしふおぼしめされけるより、御なうつかせ給ひて、つゐにほうぎよなりぬ。ほうわう御なげきのみうちつゞき、御かなしみぞひまなかりける。さんぬるゑいまんには、だい一の御子、二でうのみんほうぎよなり、又あんげん二ねん七月には、御まご六でうのみんかくれさせ給ひぬ。同八月七日、天にすまばひよくのとり、ちにすまばれんりのえだとならんと、ぎんがのほしをさして、御ちぎりあさからざりし、けんしゆんもんゑんも、あきのしもにおかされて、あしたの露ときえさせ給ぬ。とし月はかさなれども、きのふけふの御わかれのやうにおぼしめして、御なみだいまだつきせぬに、ちしう四年の五月には、だい二の御子、たかくらのみやうたれさせ給ひぬ。げんぜごせたのみおぼしめしつる此君さへさきたゞせ給ひぬれば、たゞとにかくにつきせぬは御なみだなり。かなしみのいたつてかなしきは、おひてこにをくれたるよりかなしみなし。うらみのことにうらめしきは、わかふしておやにさきだちしより、うらみなるはなし。らうせうふぢやうをしるといへども、なをせんごのあひちがふにまよふと、かのともつなのしやうここのしそくすみあきらにをくれてかきたりしふでのあと、いまこそおぼしめししられて

一じうめうでん一乗
妙興。
くはんにゆ一薰修（覺
一本）

あはれなれ。さるまゝにかの一じうめうでんの御どくじゆもおこたり給はず、三みつのぎやうぼうの御くはんじゆもつもらせ給ひけり。天がくらやみになりしかば、くものうへ人はなのたもともやつれにけり。大じやうにう道、日ごろいたふなさけなふふるまひをきし事ども、さずがおそろしくやおもはれけん、ほうわうをなぐさめまいらんとて、あきのいつくしまのないしがはらの御むすめ、しやうねん十八さいになり給ふ。ゆうにはなやかにましゝけるを、ほうわうへまいらせらる。上らう女ばうたちあまたゑらばれ、くぎやうてん上人おほくぐぶして、ひとへにきさき御じゆだいのぎしきにてぞありける。じやうくほうかくれさせ給てのち、わずか三七日だにもすぎざるに、いつしかかくあるれい、しかるべからずとぞ人々はさゝやきあはれける。

よしなかむほん

そのころしなの國に、木そのくはんじやよしなかといふ源氏ありときこえけり。これはこ六でうはんぐはためよしがじなん、たちはきせんじやうよししかたがこなり。よししかたは、きうじゆ二年八月十六日、むさしの國大くらにして、おみのかまくらあくげんだよしひらがためにちうせられたり。そのときよしなか二さいになりけるを、はゝなくゝいだひて、しなの國にこゑて、木そのちう三かねとをがもとへゆき、いかにもしてこれそだて人になして見せ給へといひければ、かねとをうけとつて、かひぐゝしふ廿四年やういくす。やうゝ人となるまゝに、

つねには……以下第一
本より簡略。

ちからもよにすぐれてつよく、心もならぶものなし。つねにはいかにもして平家をほろぼして、世をとらばやなんぞ申ける。かねとを大きによろこんで、そのれうにこそ、きみをば此廿四ねんやういく申候へ。かくおほせられ候こそ、八まんの、御すゑとはおほえさせ給へと申ければ、木そ心いとゞたけくなつて、ねの井のおほやた、しげの、ゆきちかをはじめとして、こく中のつはものをかたらふに、一人もそむくはなかりけり。かうづけの國には、こたちはきせんじやうよしかたのよしみによつて、なはのひろずみをはじめとして、たこのこほりのもの共みなしたがひつく。平家すゑになるおりをえて、げんじねんらいのそくはいをとげんとほつす。木そといふところは、しなのにとつてもみなみのはし、みのの國のさかひなり。みやこもむげにほどこかければ、平家の人々もれきゝて、こはいかにとぞさはがれける。にう道しやうこくの給ひけるは、それこゝろにくからず。おもへばしなのこくのつはものこそしたがひつぐといふとも、ゑちこの國には、よ五しやうぐんのまつえう、じやうの太郎すけなが、同四郎すけもち、これらはきやうだいともにたぜいのものなり。おほせくだしたらんずるに、などかうちてまいらせざるべきとの給へば、いかゞあらんずらむと、ない／＼はさ／＼やくものもおほかりけり。同二月一日ゑちこの國のおう人、じやうの太郎すけなが、ゑちこのかみににんず。これは木そをついばつすべきはかり事とぞきこえし。同七日みやこには、大じんいげいゑ／＼にして、そんしうだらに、ふどうみやうわうをかきくやうせらる。これはひやうらんのいのりのためなり。同九日かはちの國いしかはのこほりに候けるむさしのごんのかみにうだうよしも

とがしそく、いしかはのほんぐはんたいよしかね、ひやう衛のすけよりともにどうしんのよしきこえしかば、にう道しやうこく、やがてうちてをさしつかはす。うちての大しやうには、源太夫はんぐはんすゑさだ、つのはんぐはんもりずみ、三千よきにてかはちの國へはつかうす。

じやうのうちにこそそのせい百きにはすぎざりけり。ときをつくりやあはせして、入かへくすこくたゝかふ。じやうないのつはものども、てをひたゝかひうちじにするものおほかりけり。むさしのごんのかみにうだうよしもとうちじにす。しそくいしかはのほんぐはんたいよしかね、いたでをひていけざりにせらる。同十日よしもとほうしがくび、おほちをわたさる。りやうあんにぞくしゆをわたさるゝ事は、ほりかはの天わうほうぎよのとき、さきのつしまのかみみなもとのよしちかゝかうべをわたされしれいとぞきこえし。同十二日ちんぜいよりひきやくきたりけり。うさの大ぐうじきんみちが申けるは、きうしうのもの共、をがたの三郎をはじめとして、うすき、へつき、きくち、はらだ、まつらたうにいたるまで、ひたすら源氏に心をつうじて、だざいふの下ちにもしたがはずとぞ申ける。とうごく、ほつくくすでにそむき、なんかいだうには、くまのゝべつたうたんぞういげ、みな平家をそむゐて源氏にどうしんしけり。四いたちまちにみだれぬ。よはたゞいまうせなんずと、心ある人かなしまずといふ事なし。さきのう大しやうむねもり申されけるは、うちてはきよねんもつかはして候へども、しいだしたる事もなし。こんどはむねもりとうごくへまかりむかひ候はんと申されければ、上下しきだいしで、もつともしかるべふ候。さやうにも候はゞ、たれもしりあしをばふみ候はじ。ぶくほんに

なんかいこの前に、
髪一本は額入道西家の
事がある。

そなはり、ゆみやにたづさはらん人々は、みなう大しやうどのを大しやうとして、とうごくへはつかうすべきよしをこそせんげせられけれ。

にう道しきよ

同廿七日さきのう大しやうむねもり、源氏ついはつのためにとうごくへのかどでときこえしかば、にう道しやうこくれいならざる事いでき給へりとして、う大しやうそのかどでとゞまりぬ。同廿八日よりおもきやまひうけ給へりとして、京中六はら大ちうちかへしたるごとくにさはぎあへり。たかきもいやしきも、これをきひて、あはしつるはとぞ申ける。にう道やまひつき給ひし日よりして、水をだにのどへもいれ給はず、身のうちのあつき事ひをたくがごとし。ふし給へるところ四五けんがうちへ入ものは、あつきたへがたし。ただの給ふ事とは、あつやくとばかりなり。ひゑいさんよりせんじゆゑんの水をくみ、いしのふねにたゝへ、それにおりてひやし給へば、水おびたゞしくわきあがり、ほどなくゆにぞなりにける。もしやたすかり給ふと、かけひの水をまかせたれば、いしやくろがねなどのやけたるやうに、水ほどばしつてよりつかず。みづからあたる水はほのほとなつてもゑければ、くろけぶりでん中にみち／＼て、うずまひてあがりけり。これやむかしほうざうそうづといふ人、ゑんまのしやうにおもむきて、はゝのむまれどころをたづねしに、ゑんわうあはれみ給ひて、ごくそつをあひそへ、しうねつちごくへつかはさる。くろがねのもんのうちへさしいれば、りうせいなんのごとくに、ほの

ほそらにたちあがり、たひやくゆじゆんにをよびけんも、いまこそおもひしられけれ。にう
道しやうこくのきたのかた、二おどのゝゆめに見給ひけるこそおそろしけれ。ふくはらのおか
の御しよとおぼしくであるところに、みやうくはおびただしくもえたるくるまを、もんのうち
へやりいれたり。くるまのせんごにたちたるものは、あるひはうしのおもてのやうなるものあ
り、あるひはむまのおもてのやうなるものもあり。くるまのまへには、むといふもじばかり
ぞ見えたるくろがねのふだをたてたりけり。二おどのゆめの心に、あれはいかにと御たづねあ
り。ゑんまより平家大じやうにう道どのゝ御むかへにまいりて候と申。さてそのふだはいかな
るふだぞととはせ給へば、なんゑんぶだいこんどう十六ちやうのるしやなぶつを、やきほろぼ
し給へるつみによつて、むげんのそこにおち給ふべきよし、ゑんまのちやうに御さだめ候が、
むげんのむをばかゝれ、けんのじをばかゝれず候なりとぞ申ける。二おどのゆめさめてのち、
あせ水になり、これを人にかたり給へば、きくもの身のけもよだちけり。れいぶつれいしやに
きんぐ七ぼうをなげうち、むまくらよろひかぶと、ゆみやたちかたなにいたるまで、とりい
だしはこびいだし、いのられけれども、しるしもなし。なんによきんだちさしあつまりて、い
かにせんとなきかなしみ給へども、かなふべしとも見えざりけり。同うるう二月(二日)二お
どのあつきたえがたけれ共、まくらがみにたちより、なくくの給ひけるは、御ありさま日に
そへてたのみすくなふこそ見えさせ給へ。おぼしめす事あらば、物おぼえさせ給ひしとき、
おほせをかれよとぞの給ひける。にう道しやうこく、さしも日ごろはゆゝしくましませしかど

したる―知つたる。

まにぞおさめてげる。されば日ほん一しうになをあげぬをふるひし人なれども、へんじのけぶりとなり、しかばねははまのいさごにうづんで、むなしきつちとぞなり給ふ。さうそうの夜、ふしぎの事どもあまたありき。たまをみがき、きんぐをちりばめつくられし、にし八でうどの、その夜にはかにやけにけり。人のいゑのやくるはつねのならひなれども、いかなるものゝしわざにやありけん、はうくはとぞきこえし。又その夜六はらのきたにあたつて、人ならば二十三人がこゑにて、うれしやたきのみづ、なるはたきの水、日はてるともたえずと、ひやうしをいだしまひおどり、どつとわらふこゑしけり。さんぬる正月しやうくはうかくれさせ給ひて、天がくらやみとなりぬ。わづかに一兩月をへだてて、にう道しやうこくこうぜられぬ。あやしのしづのお、しづのめにいたるまで、いかでかうれひざるべき。これはいかさまにも、天ぐのしよゐといふきたあり。平家のさぶらひどもの中に、はやりおのわかものども百よ人、わらふこゑにつゐてたづねゆきて見ければ、ぬんの御しよほうぢうじどのに、此二三年はぬんわたらせ給はず、御しよあづかりのびぜんのぜんじもとむねといふものあり。もとむねあひしたるものども二十三人、夜にまぎれてきたりあつまり、はじめはかゝるおりふしに、をとなしそとて、さけをのみけるが、しだいにのみえひて、さまぐまひおどりとかなや。をしよせさけにゑひけるもの共、一人ももらさず、三十人ばかりからめとつて、六はらへまいり、さきのう大しやうむねもりのきやうのおはしけるまへのつばのうちにぞひつすえたる。ことのやうをよくくたづねきゝ給ひて、げにもさやうにゑひたらんものは、きるべきにもあらずとて、

おうにん^{一應}
保(覺一本)。

みなゆるされけり。人のうせぬるあとには、いかなるあやしものも、あさゆふにけいうちならし、れいじせんぼうよむ事はつねのならひなるに、にう道しやうこくは、しせられてのちとても、くぶつせそうのいとなみといふ事もなし。たゞあけてもくれても、いくさかつせんのはかりごとのほかはたじなし。をよそはさいごのしやうのありさまこそうたてけれども、まことにはたゞ人とおおぼえぬ事どもぞおほかりける。日よしのやしうへまいり給ひしときも、たうけたけのくぎやうおほくぐぶして、(せつ)ろくしんのかすがの御さんろう、うち入なんどゝいふともいかでかこれにはまさるべきとぞ人申ける。又なに事よりもふくはらのきやうのしまつゐて、いまのよにいたるまで、上下ゆききのふねにわづらひなきこそめでたけれ。かのしまはさんぬるおうにん元年二月上じゆんつきはじめられたりけるが、同八月にはかに大かぜふき、大なみたちてゆりうしなひてき。同三年三月下じゆんに、あはのみんなしげよしぶぎやうにてつかせられけるが、人ばしらたつべしなんどくぎやうせんぎありしかども、それはさいぐうなりとて、いしのおもてに一さいきやうをかきてつかれたりけるゆへにこそ、きやうのしまとはなづけられけれ。

ぎをんのねうご

ふるき人の申されけるは、きよもりはたゞもりがこにはあらず、まことにはしらかはのあんの御こなり。そのゆへは、さんぬるゑいきうのころ、ぎをんのねうごときこえて、さいわいの人

おはしき。くだんの女ぼうのすみ給ひけるところは、ひがし山のふもと、ぎおんのへんにてぞありける。しらかはのゐんつねは御かうありけり。あるときてん上人一兩人、ほくめんせうくめしぐして、しのびの御かうのありしに、ころは五月廿日あまりのゆふぞらの事なりければ、めざせどもしらぬやみにてあり、さみだれさへかきくもり、まことに申ばかりなく、らかりけるに、此女ぼうのしゆく所ちかく、みだうあり。此みだうのそばに大きなひかり物いできたる。かしらはしろがねのはりをみがきたるやうにきらめき、さうのてとおぼしきをさしあげたるが、かたてにはつちのやうなる物を持ち、かたてにはひかる物をぞもちたりける。きみもしんも、あなおそろしや、まことのおとぼゆるなり。もちたる物は、きこゆるうちでのこづちなるべし。こはいかにせんとさはがせましますところに、ただのりそのころほくめんの下らうにてぐぶしたりけるをめして、此うちになんぢぞあらん。あのひかり物ゆきむかひて、いもころしきりもころしなやとおほせければ、かしこまつてうけ給り、ゆきむかふ。ないくおもひけるは、此ものさしもたけき物とは見えず、きつねたぬきなどにてぞあらん。これをいもとゞめ、きりもとゞめたらんはよにねんなかるべし。いけどりにせんとおもひてあゆみよる。とばかりあつてはさつとはひかり、とばかりあつてはさつとひかり、二三どしたるを、たゞもりはしりよりてむずとくむ。くまれてこのもの、いかにとさはぐ。へんげのものにてはなかりけり。はや人にてぞありける。そのとき上下てゝにひをとぼし、御らんあるに、よはひ六十ばかりのほうしなり。たとへばみだうのじうじほうしにてありけるが、みあかしまいら

せんとて、てびやうといふ物にあぶらをいれてもち、かたてにはかはらけにひをいれてぞもちたりける。あめはふる、ぬれじとかしらにはこむぎのわらをひきむすびかづきたり。かはらけのひにこむ(ぎ)わらがかゞやきて、しろがねのはりのやうには見えけるなり。事のていいち／＼にあらはれぬ。きみの御かんなのめならず。これをいもころし、きりもころしたらんには、いかにねんなからんに、ただもりがふるまひこそしりよふかけれ。ゆみやとる身はかへす／＼もやさしかりけりとて、そのくはうみやうに、さしも御さいあいときこえしぎをんのねうごを、たゞもりにこそ給りけれ。されば此女ばう、あんの御こをはらみたてまつりしかば、むめらんこ、によしならばちんがこにせん、もしなんしならば、たゞもりがこにしてゆみやとる身にしたてよとおほせけるに、すなはちなんしをむめり。たゞもりことにあらはしてはひろうせられざりけれども、ない／＼はもてなしけり。此事そうもんせんとくかゞへども、しかるべきびんぎもなかりけるが、あるとき此しらかはのあんくまのへ御かうありけるに、きいの國いとか山といふところに、御こしかきすゑさせて、しばらく御きうそくありけるに、やぶにぬかごのいくらもありけるを、たゞもりそでにもりいれて、御ぜんにまいり、

いもがこはふほどにこそなりにけれ

と申されたりければ、ほうわうやがて御心ゑありて、

たゞもりとりてやしなひにせよ

とぞおほせくだされける。それよりしてこそわがことはもてなしけれ。此わかぎみあまりに夜

なきをし給ひければ、ぬんきこしめして、一しゆのうたをぞあそばひてくだされけり。

夜なきすとたゞもりたてよすゑのよにきよくさかふることもあるべし

さればこそきよもりとはなのられけれ。十二のとしひやう衛のすけになる。十八さいにて四ゐにして四ゐのひやう衛のすけと申しを、しさいぞんぢせぬ人は、くはぞくの人こそ、かくはと申せば、とばのぬんもしろしめされ、きよもりがくはぞくは人にはをとらじとぞおほせける。

をむみ―はらみ（覺一本）

むかしも天ぢ天わうをむみ給へるぬうごを、たいしよ（く）くほんに給るとて、此ぬうごのむめらんこ、によしならばちんがこにせん、なんしならば、しんがこにせよとおほせけるに、すなはちなんしをむみ給へり。たうのみねのほんぐはん、ぢやうゑくはしやうこれなり。上だいにまかゝるためしありければ、まつだいに、平大しやうこく、まことはしらかはのぬんの御こにてましゝければにや、さばかんの天がの大事のみやこうつりなんどもたやすふおもひたゝれけるにこそ。ことはりなりとぞ人申ける。

じゑ―慈恵、以下覺一本と甚しく異なる。

かおう―承安（覺一本）

此にう道しやうこくと申は、じゑ大そう正のけしんなりといへり。そのゆへは、つの國にせいちうじといふ山でらあり。此てらのちうそうに、じゝんばうそんゑとて、天がにきこえたるぢきやうじやあり。もとはさんもんのちうりよたりしが、だうしんをおこし、りきんして、此山にぢうしけるが、たねんほけきやうをたもつものなり。さんぬるかおう二ねん二月廿二日の夜のやはんばかりに、じゝんばうがゆめに見るやうは、じやうへきたるぞく二人、どうじ三人、一つうのじやうをさゝけていできたり。じゝんばう、これはいづくよりにて候ぞととへば、ゑん

ま大わうぐうよりと申。そのとき、じゝんばう、此じやうをとりひらきて見れば、きたる廿六日さうたんよりゑんま大わうぐうの（大）ごくでんにて、十まんぶのほけきやうをよみくやうせらる。しかるあひだ十まんごくより十まん人のそうをしやうぜらる。そのきやうしゆ一ぶんに入給へり。同らいしゆせらるべし。せんじによつて、くつじやうくだんのごとし。ゑんまちやうとぞかゝれたる。じゝんばうはゆめのうちに御うけを申をはん（ぬ）。ゆめさめ夜あけて、じゝんばう此てらのめんじゆ、くほうやうばうに此よしをかり申せば、さてはなごりおしき事ござんなれ。ゑんまのちやうにまいる人の二たびかへる事ありがたし。こはいかにせんとて、めんじゆをはじめとして、じそう共、一どうになごりをおしみてかなしみあへり。やうく廿六日のさうたんにをよぶ。その日になりしかば、じゝんばういよくしやうじんけつさいして、此てらのぶつぜんにまいり、ねんぶつどくきやうしてあるに、すいめんしきりなりけるあひだ、ちとまどろむとおもひたりけるに、さきのごとくにじやうゑきたるぞく二人どうじ三人むかひにとていできたれり。じゝんばう、かれらにぐせられて、しゆゆにゑんまわうぐうの大ごくでんへぞまいりける。十まん人のそうどもまいりあつまり、れきくとして、をのくどくきやうす。ほうゑのぎしきまことに心もことばもをよばず。ほうゑおはりしかば、しよそう共いとま給はつて、かへるもあり、とゞめらるゝそうもあり。そのうちにじしんばうは、ゑんまほうわうの御まへにめされてまいり、まづていじやうにかしこまつてさぶらひければ、ゑんまほうわう、ほけきやうは、五十てんぐのくどくあり。いかゞちきやうじやをていじやう

にはをくべし。これへめせとて、御ざちかくめされ、じゝんぼう、ごしやうのざいしよいかなるところにて候はんずるやらんと申せば、ゑんまわう、(わうじやう) ふわうじやうはたゞ人のしんふしんによるとどの給ひける。ゑんまわうかさねてのたまはく、わそうがほんごく大日ほんごくに、平大しやうこくといふ人あり。こん日わが十まんそうゑのごとくに、つの國わだのみさきに四めん十よちやうのやをたて、千人のちきやうじやをあつめて、七日があひだねんぶつどくきやうていねいにござんせんはいかにとど給へば、さる事候と申。ゑんまわう、その人はあく人と見えたり。されどもその人はじゑ大そう正のけしんなるによつて、われはその人を日々に三どはいするもんありとて、

きやうらいじゑ大そう正

てんだいぶつぼうおうごしや

じげんさいしうしやうぐんしん あくぐうしゆじやうどうりやく

との給ふとおもふて、そんゑはゆめさめにけん。じゝんぼう、いくほどならぬゆめのうちこそおもひけれども、七日があひだにてぞありける。じゝんぼうみやこへのぼり、にし八でうへまいり、此よしをかり申せば、にう道しやうこくいそぎいであひたいめんし給ひて、かへされけるとぞきこえし。

くはんぢ—寛治。以下
流砂懸の事で、宗論
である。

くはんぢ二年正月十五日しんかきやうしやうせんとうにて御ゆうゑんのみぎり、しゆぐのせんぎどもありける中に、ある人、そもくたうじ天ぢくにによらいしゆつせし給ひて、せつぼうりしやうし給ふとき、をよばんには、まいりてちやうもんすべしやと、一げんいできたりける

に、大じんくぎやう、みなまいるべきとぞ申されける。その中にがうのそつまさふさ、いまだう大べんの三ゐにてばつぎに候はれけるが、申されけるは、人々は御まいり候とも、まさふさにをひてはまいるべしとおぼえ候はずと申されければ、げつけいうんかくうたがひの心をなし、人々まいらんとおぼせらるゝ中に、御へん一人まいらじと申さるゝしさい、いかやうなる事ぞや。まさふさかさねて申されけるは、さん候、ほんてうたいそうのあひだは、よのつねのとかいなれば、やすきかたも候ひなん。天ぢくしんだんのさかひは、りうしやそうれいのけんなんこゑがたきみちなり。まづそうれいと申山は、にしきたはせつさんにつゞき、ひがしみなみはかいぐにそびえたり。此山をさかふにしをば天ぢくといひ、ひがしをばしんだんといふ。みちのとをさ三まんより、くさ木もをひず水もなし。ぎんかんにのぞんで目をくらし、はくうんをふんで天にのぼる。かくのごとくのおほくけんなんある中に、ことにたかくそびえたるみねあり。せつはらさいなんとなづけたり。くものへうゑをぬきさけて、こけのころももきぬ山のいはおのかどをかゝえつゝ、十日にこそこゑ給はめ。此みねにのぼりぬれば、三千せかいのひろさせばさはまなこのまへにあきらかに、一ゑんぶだいのゑんさんは、あしのしたにあつめたり。又りうしやといふかはあり。此かはをわたるに、水をわたつてはかはらをゆき、かはらをゆきては水をわたる事、八か日があひだに六百三十七となり。ひるは風ふきたて、いさごをとばする事あめのごとし。よるはばけものはしりちつてひをとす事ほしににたり。しらなみなぎりきたつてがんせきをうがつ。せいゑん水まゐて木のはをうづむ。たとへしんゑんをわた

ばけ―天鬼。
さみのふい―鬼魅の怖
畏。
難。すいはの―水波の漂

げんしう―現證。

げんにん―源仁。
道性。道應。圖澄。

うくう中―有空中。

ざうつうべちゑん―蔵
通別圖。

るとも、ばけのがいなんのがれがたし。たとひきみのふいをまぬがるといふとも、すいはの
ひうなんさけがたし。さればかのげんじやう三ぎうも、六どまで此さかひにていのちをうしな
ひ給ふ。しかれども又つぎのじゆしやうのときこそ、ほうをばわたし給ひけれ。しかるを天ぢ
くにあらず、しんだんにあらず、ほんでうかうやさんに、しやうじんの大しにうちやうしてま
します。此れいちをいまだふまずして、いたづらに月日をくる身の、たちまちに十まんよりの
さんかいをしのぎ、けんろをすぎて、りやうじゆせんまでまいるべきともおぼえず。天ぢくの
しやかによらい、わがてうのこうぼう大し、ともにそくしんじやうぶつのげんしう、これあら
たなりとぞ申されける。むかしさがのくはうていの御とき、大し、ちよくめいによつて、せい
りやうでんにして、四かの大じうしうをあつめ、けんみつほうもんのろんどくをいたし給ふ事
あり。ほつさうじうにはげんにん、三ろんじうにはだうしやう、けごんじうにはだうおう、天
だいしうにはゑんちう、をのゝわがしうのめでたきやうをたて申。まづほつさうしうのげん
にん、わがしうには三じけうをたて、一だいのしやうけうをはんず。いはゆるうくう中これな
り。三ろんじうにはだうしやう、わがしうには三ぎうをたつ。三ぎうといつば、しやうもんざ
う、ゑんがくぎう、ぼさつぎうこれなり。けごんじうのだうおう、わがしうには五けうをた
て、一だいのしやうけうをおしふ。五けうといつば、しけう、しうけう、とんけう、ゑんけう
これなり。天だいしうのゑんちう、わがしうには、四けう五みをたて、一さいのしやうげうを
をしふ。四けうとはざうつうべちゑんこれなり。五みとはうらくしやうじゆくだいごこれな

教相。じょうさうけうさう—事相

もんしう—文證。

ぎまう—疑網。

しゆし…修此三昧
者、現證佛菩提、父母
所生身、即證大覺位。

きぎ—軌儀。

り。そのときしんごんじうのこうぼう、わがしうにはしばらくじさうけうさうをしふといへども、たゞしそくしんじやうぶつのぎをたて、一だいしやうげうひろしといへども、いづれかれにをよぶべきや。ときに四人のせきとくぎしんをなし、しんごんのそくしんじやうぶつのぎをうたがひ申されたり。まづぼつさうしうのげんにんそうづ、こうぼうをなんじたてまつることばにいはいく、をよそ一だい三じのけうもんを見るに、みな三ごうじやうぶつのもんのみあつて、そくしんじやうぶつのもんなし。いづれのしやうげうのもんしうによつて、そくしんじやうぶつのぎをたてらるゝぞや。まことにそのもんあらば、つぶさにそのもんをいだされて、しゆゑのぎまうをはらさるべしといへり。こうぼうこたへてのたまはく、なんちかしやうげうの中には、みな三ごうじやうぶつのもんのみあつて、そくしんじやうぶつのもんなしとて、もんしうをいだしてのたまはく、しゆし三まいしや、げんしうぶ(つ)ばだい、ぶもしよしやうしん、そくしう大かくみ、これをはじめて、もんしうをひき給ふ事はんたなり。げんにんかさねてはいはく、もんしうはすなはちいだされたり。此もんのごとくにそくしんじやうぶつのむねをえたるそのにんしうたれ人ぞや。こうぼうこたへてのたまはく、そのにんしうはとをくたづぬれ(ば)、大にちこんがうさつた、ちかくたづぬれば、わがみすなはちこれなりとて、かたじけなくもりうがんにむかひたてまつり、くちにみつごんをじゆし、てにみついをむすび、(心に)くはんねんをこらし、身にきぎをそなふ。しやうしんのにくしんたちまちにげんじて、しまわうごんのはだへとなり給ふ。かうべに五ぶつのほうくはんをげんじて、くはうみやうさう天をてらし、にちりんのひかりを

しよしゆ―諸衆。

かく―客。

もんよう―門葉。

だうりう―道流。

六じやう―六情不退。

うばひ、てうていははりにかゞやゐて、じやうどのしやうごんをあらはす。そのときくはうていみぎをさつてれいをなし給ふ。しんか身をつゞめておどろきちにふす。ひやくくはんかうべをかたづけ、しよしゆがつしやうす。まことになんとの六しう、ちにひざまづき、ほくれい四めいのかく、にはにふす。げんにんゑんちうもしたをまき、だうおうだうしやうもくちをとづ。つめに四しうきふくして、もんようにまじはる。はじめて一てうしんかうして、そのだうりうをうく。三みつ五ちのみづ四かいにみちて、ちんくをそゞぎ、六天むげの月一天のちやうやをてらす。されば御一ごのゝちも、しやうしんふへんにして、じそんのしゆせをまち、六じやうふだいにして、きねんのほうをんをきこしめす。此ゆへにげんぜのりしやうもたのみあり。ごしやうのいんだうもうたがひなしとぞ申されける。しやうくはうきこしめし、まことにめたき事なり。これをいままでおぼしめししらざりけるこそ、かへすゞもおろかなれ。かやうの事は、ゑんいんしぬればじねんにさはりある事もありやとて、みやう日の御かうとおほせければ、まさふさかさねて申されけるは、みやうてうの御かうはあまりにそつじにおぼえ候。むかししやくそんりやうぜんのせつぼうのにはに、十六大こくのしよわうたちのみゆきし給ひしぎしきは、きんぐをのべてほうよをつくり、しゆぎよくをつかねてくはんがいをかざり給ひけり。これみなけうのおもひをなし、ずいきかつがうの心ざしをつくし給ふさほうなり。きみのみゆきそれにとらせ給ふべからず、かうやさんをばりやうじゆせんとおぼしめし、しやうしんの大しをしやかによらいとくはんぜさせ給ひて、日かずをのべてみゆきのぎしきをひきつく

ろはせ給ふべふや候らんと申されければ、げにもとて、此日をのべて、れうらきんしうをあつめていしやうをとゝのへ、きんぐ七ぼうをちりばめて、むまくらをよそをひ給ひけり。これかうや御かうのはじめなり。しらかはのめんかやうにかうやをしつしおぼしめされたりしかば、その御こにて、きよもりもかうやの大たうをしゆりせられけるにや、ふしぎなりし事どもなり。

くにつなしきよ

しうまう―焼亡。

ほうぢうじ―法性寺
(覺一本)。

同うるふ二月廿日五でうの大なごんくにつななきやうもうせ給ひぬ。平大しやうこくとさしもちぎりふかく、心ざしあさからざりし人なり。せめてのちぎりのふかきにや、おなじ日にやまいつきて、同月にぞうせられける。此大なごんと申は、中なごんあきすけのきやうの八だいのまつよう、さきのむまのすけもりくにのこなり。しんじのぎつしきにて候はれしが、この衛のめん御ざいあのときは、くげにしこうせられけり。にんべいのころ四でうのだいらにはかにしうまういできたり。なんでんにしゆつぎよなりしかども、この衛づかさ一人もまいらず、あきれさせ給ふところに、かのくにつなたごしをかひてまいりたり。かやうのときは、かゝる御こしにこそめされ候へとそうしければ、しゆじやうこれにめしてしゆつぎよなる。なにもものぞと御たづねありければ、しんじのぎつしき、ふぢはらのくにつなとなり申。しゆじやう御かんあつて、かゝるさかゝしきものこそあれとてめしいだされ、そのときのてんが、ほうぢうじどの

におほせければ、御りやうあまたたびなんどして、めしつかはれけるほどに、おなじみかどの御とき、やはたへぎやうがうありけるに、にんちやうのさけにゑいて、水にたふれ入、しやうぞくをぬらし、御かぐらちゝたりけるに、此くにつなてんがの御ともに候はれけるが、くにつなしてにんちやうのしやうぞくはもたせて候とて、一具とりいだされければ、これをきて御かぐらとゝのへそうしたり。ほどこそすこしをしうつりたりけれども、うたのこゑもすみのぼり、ひやうしにあふておもしろかりけり。身にしてみてもおもしろき事は、かみも人もおなじ心なり。むかしあまのいわとをしひらきけるかみよのことわざまでもいまこそおもひしられけれ。やがて此くにつなせんぞ、山かげの中なごんのそのこに、じよむそうづとて、ちゑさいかく身にあまり、じやうぎやうぢりつのそうおはしき。くはんじゆじのない大じんたかふちこうのしそく、いづみの大しやうさだくに、をぐら山のあらしにゑぼしをかはへふきいられ、そでにてたぶさをさえ、せんかたなくたゝれたるところに、じよむそうづ三ゑばこのうちよりゑぼしを一ツとりいだされ、大しやうにたてまつる。此そうづはちゝ山かげの中なごん大ざいの大にして、ちんせいへくだされけるとき、二さいなりしを、けいぼにくんであからさまにだくやうにして、水におとしいれころさんとしけるを、かめどもうかれきて、こうにのせてぞたすける。これはまことのはゝぞんじつに、かつらのうがひがかめをとりて、うのゑにせんとしけるを、こそでをぬぎてかめにかえはなたれしそのおんをほうぜられしかや。それは上代の事なればいかゞありけん、まつだいに此くにつなごのきやうのかうみやうありがたき事どもなり。ほ

御だい―御世
(覺一本)

くしつ―敬慕。

がくはう―峨黃。女英。

つしやうじどの、御だいに、中なごんにぞなられける。ほつしやうじどのかくれさせ給ひてのち、にう道しやうこくぞんずるむねありとて、此人はかたらひよりあひ給へり。大ふくちやうじやでおはしければ、なにゝてもかならずまい日一しゆにう道のもとへをくられけり。げんぜのとくい、此人にすぐべからずとて、しそく一人やうじにして、きよくにとなのらせ、じゅうになす。にう道の四なんとうの中じやうしげひらは、かの大なごんのむこになす。おしう四年の五せつはふくはらにておこなはれけるに、中ぐうの御かたへてん上人あまたすいさんありし中に、ある人、くもはくしつのとをこらし、たけはしやうほのきしにまだらなりといふらうゑいをせられたりければ、かの大なごんたちぎゝし給ひて、あなあさましや、これはきんきとこそうけ給はれ。かやうの事は、きくともきかじとて、いそぎまかりいでられぬ。此しの心は、むかしぎうのみかど二人のひめみやましゝき。あねをばくはうといひ、いもとをばぢよゑいといふ。ともにしゆんわうのきさきなり。しゆんかくれさせ給ひしかば、さうごといふ野におさめたてまつる。きさきみかどのわかれをかなしみ給ひて、しやうほのきしにいたり、なき給ひけるなみだの、たけにかゝりてまだらにぞそみたりける。そののちつねにかの所におはして、ことをひめてなぐさみ給ふ。いまかのところを見れば、きしのたけはまだらにてたてり。ことをしらべしあとは、くもそびえて物あはれなる心を、たちばなのしやうこいうまのしにつくらるなり。かの大なごんはさせるぶんさい、ことばしいか、うるはしくはましまさざりけれども、さかゝしき人にて、かやうの事もきゝとがめられけるにこそ。この(人)大なごんさ

ればおもひもよらざりしを、は、うへかもの大みやう神に心ざしをいたしあゆみをはこび、こひねがはくは、わがこ國つな一日にてもさぶらへ、くらんどのかみをへさせ給へと、百日かんとんをくだきていのり申されければ、ある夜のゆめに、びんらうのくるまをもちきたりて、わがいゑのくるまよせにたつるとゆめを見て、人にかたり給へば、それはくぎやうのきたのかたにこそならせ給はんずらめとあはせたりけるを、われとしすでにたけたり。いまさらさやうのふるまひあるべしとおおばえずとの給ひけるが、御子くにつな、くらんどのかみはこともよろし、正二ゐの大なごんにあがられけるこそめでたけれ。

すのまたがは

かば―かど聲一本。

はへ―破壊。

けれ共―ければ（聲一本）。

同廿二ほうわうぬんの御しよほうぢうじどのへ御かうなる。此御しよはさんぬるおうほう三年四月十五日にぎうしゆつされて、いまひゑい、いまくま野をさうにくはんじやうしたてまつり、せんずいのこだちにいたるまでおぼしめすやうりしかば、此二三年は平家のあくぎやうによつて御かうもならず、御しよのはへしたるをしゆりして、御かうをなしたてまつるべきよし、う大しやうむねもりのきやうそうせられけれ共、ほうわうなにのさたにもをよぶべからず、たゞとく／＼とて御かうなる。まつこけんしゆんもんぬんの御かたを御らんずれば、きしのやなぎ、みぎはのまつ、としへにけりとおおばえて、こだかくなれるにつても御なみだぞすゝみける。同三月一日なんとのそうがうとうほんぬにふくして、まつじしやうゑんものとのごとく

ちぎやうすべきよしおほせくださる。

同三日大ぶつでんつくりはじめらる。ことはじめのぶぎやうには、くらんどさせうべんゆきたかまいられける。此ゆきたか、せんねんやはたへまいりつやせられたりけるゆめに、御ほうでんのうちより、びんづらゆふたる天どうのいで、これは大ばさつの御つかひなり。とう大じのぶぎやうのときは、これをちすべしとて、しやくをくだし給ふとゆめに見て、さめてのち見給へば、うつゝにありけり。あなふしぎ、たうじな事によつてか、ゆきたか大ぶつでんのぶぎやうにはまいるべきとて、くはい申してしゆくしよにかへりて、ふかふおさめてをかれたりけるが、平家のあくぎやうによつて、なんとゑんじやうのあひだ、ゆきたかべんのうちにゑらばれて、ことはじめのぶぎやうにまいられけるしゆくゑんのほどこそめでたけれ。

同三月十日みのゝ國のもくだい、みやこへはやむまをもつて申けるは、とうごくの源氏どもすでにおはりの國までらんにうして、みちをふさぎ人をとをさぐるよし申たりければ、やがてうちてをつかはす。うちての大しやうぐんには、さひやう衛のかみのりもり、させうしやうきよつね、同せう將ありもり、そのせい三まんよきにて、おはりの國へはつかうす。にう道しやうこくうせ給ひて、わづかに五じゆんだにもすぎざるに、みだれたるよとはいひながら、あさましかりし事どもなり。源氏のかたには、十郎くらんどゆきいゑ、大しやうぐんにて、ひやう衛のすけのしやてい、きやうのきみのぶきよ、つがうそのせい六千よき、おはりの國す野またがはのひがしにちんをとる。平家は三まんよき、かはよりにしにちんしたり。同十六日の夜にい

はかなく―おろか（蟹一本）
 やつはしがは―やはぎ
 かわ（蟹一本）

りて、源氏六千よきはをわして、平家三まんよきが中へおめひてかけいり、あくれば十七日のとらのこくにやあはせして、夜のあくるまでたゝかふに、平家はちともさはがず、かたきはかはをわたしたれば、むま物のぐみなぬれたるぞ、それをしるしにうてやとて、大ぜいの中にとりこめて、あますなもらすなどてせめければ、源氏のせいのかりすくなふうちなされ、大しやうぐん十郎くらんどゆきいゑ、からきいのちをいきて、かはよりひがしへひきしりぞく。きやうのきみのぶきよふかいりしてうたれにけり。平家やがてかはをわたひてかつにのりをつかくる。かしこゝにかへしあはせゝふせぎたゝかへども、ぶぜいなり、平家はたぜいなりければ、かなふべしとも見えざりけり。こんどは源氏のはかり事はかなくなりとぞ人申ける。大將ぐん十郎くらんどゆきいゑ、みかはの國やつはしのはしをひきふせがんとまちかけたり。平家やがてをしよせせめければ、こらへずしてそこをせめおとされぬ。平家つゝゐてせめられば、みかはとをたふみのせいつくべかりしに、大しやうぐんさひやう衛のかみのりもりしやうとて、みかはの國よりかへりのぼらる。こんどもわづかに一ちんばかりやぶるゝといへども、ざんたうをせめねば、しいだしたる事もなきがごとし。平家はきよゝねんこまつどのこうぜられぬ。こんねん又にう道しやうこくうせ給ふ。うんめいのすゑになる事あらはなりしかば、ねんらいおんこのともがらのほかは、したがひつくものなかりけり。とうごくには、くさも木もみな源氏になびくとぞきこえし。

じやうの太郎とんし

さるほどにゑちこの國のちう人、じやうの太郎すけなが、たうごくのかみににんずる。ぢうおんのかたじけなさに、木そついたうのために、そのせい三まんよき、六月十五日かどでして、あくる十六日のうのこくにうちたゝんとしけるやはんばかり、にはかに大かぜふき、大あめふり、なるかみおびたゞしくなつて、そらはれてのち、くもぬに大きなるこゑのしはがれたるをもつて、なんゑんぶだいい一のこんどう十六ぢやうのるしやなぶつ、やきほろぼしたてまつる、平家のかたふどするじやうの太郎これにあり、めしとれやと、三こゑさけびてぞとをりける。すけながをさきとして、これをきくものみな身のけもよだちけり。らうどうども、これほどおそろしき天のつけ候には、たゞことはりをまげ、とゞまらせ給へと申けれども、ゆみやとるもの、それによるべからずとて、あくるうのこくにじやうをいでゝ、十よちやうをゆきたりけるに、くろくも一むらたちきたつて、すけながゞうへにをほふと見えければ、うちふす事三ときばかりしてつゐにしにゝけり。此よしひきやくをたてゝみやこへ申ければ、平家の人々大きにさはがれけり。同七月十四日かいげんありて、やうわとがうす。ちくごのかみさだよし、ちくぜんひごりやうごくを給はつて、ちんぜいのむほんたいらげんために、さいこくへはつかうす。その日又ひじやうの大しやおこなはる。さんぬるぢしう三年にながされ給ひし人々、みなめしかへさる。まつどのゝにう道てんが、びぜんの國よりのばらせ給ふ。大じやう大じんめ

うをんぬん、おはりの國よりきらくとぞきこえし。あぜちの大なごんすけかた、しなのゝ國より御じやうらく。同廿八日めうをんぬん御めんざん。さんぬるちやうくはんのむかしのきらくには、御ぜんのすのこにして、がわうおん、げんじやうらくをひかせさせ給ひしに、やうわのいまのきらくには、せんとうにしてしうふうらくをぞあそばしける。いづれもそのふぜいおりをえて、おぼしめしより給ひけん、御心のうちこそめでたけれ。あぜちの大なごんすけかたのきやうも、その日ぬんざんせらる。ほうわう、いかにやゆめのやうにこそおぼしめせ。ならばぬひなのすまゐして、ゑいきよくなんどもいまはあとかたもあらじとおぼしめせども、いまやうひとつあらばやとおほせければ、大なごん、ひやうしをとつて、しなのにあんなる木そぢがはといふいまやうを、これはわが見給ひたりしあひだ、しなのなるきそぢがはとうたはれけるぞときにとつてかうみやうなる。同八月七日くはんのちやうにして大にんわうゑおこなはる。これはまさかどついはつのれいとぞきこえし。同九月一日すみともついはつのれいとて、くろがねのよろひかぶとを大じんぐうへまいらせらる。ちよくしは、さいしゆじんぎごんのたゆう大なかとみのさだたか、みやこをたつていせへまいりけるが、あふみの國かうがのむまやにしてしやううつゐて、いせのりきうにしてしにけり。又むほんのともがらてうぶくのために、さんもんにて、五だんのほうを三七日おこなはれけるに、しよ五日にあたつて、がう三ぜのだんの大あじやりかくぜんほういん、大ぎやうじのひがんじよにてねじにゝこそしにけれ。しんめい三ぼうも御なうじゆなしといふ事いちじろし。又だいげんのほううけたまはつてしゆせられけ

あんじやうじ—安祥寺。
じちげん—曾玄。

るあんじやうじのじちげんあじやりが御くはんじゆをまいらせたるを、ひけんせられければ、平氏ちうぶくのよしをしるしたりけるぞおそろしき。此ほうししぎいにやおこなふべき、又るざいにかとさたありしかども、大小事のそうげきにうちまぎれて、さたもなかりけり。よしづまつてのち、かまくらどのしんめうなりとかんじおぼしめし、そのしやうに大そう正になされしとぞきこえし。同十二月廿四日、中ぐうめんがうかふむらせ給ひて、けんれいもんゐんとぞ申ける。いまだゆうせうの御とき、はゝきさきのめんがうこれはじめなりとぞ申ける。さるほどにやうわも二年になりにけり。

ゆうせう—幼主（覺一本）。

同そのとし二月廿三日、大はくばうせいをおかす。天もんようろくには、大はくばうせいをおかすときに、しやうぐんみやこのほかにいづといへり。又しやうぐんちよくめいをかふむつて、くにのさかひをいでゝたちまち四いおこるとも見えたり。同三月十日ちもおこなはれて、平家の人々たいりやくくはんかかいし給ふ。四月十四日さきのごんせうそうづけんしん、日よしのやしろにして、ほけきやう一まんぶてんどくする事あり。御けちゑんのために、ほうわうも御かうなる。いかなるものゝ申いだしたりけるやらん、一ゐんさんもんの大しゆにおほせて、平家をついばつせらるべしときこえしほどに、ぐんびやうだいいりへまいりて四はうのちんとうをけいごす。平家の一るいみな六はらへはせあつまる。本三ゐの中將しげひらのきやう、そのせい三千よきにてほうわうの御むかへに日よしのやしろへまいりむかはる。さんもんにきこえけるは、平家山をせめんとて、すまんぎのぐんびやうをそつして、とうざんするとき

あなお—穴太。

(二) ゑしかば、大しゆみなひがしきかもとへくだりて、こはいかにとせんぎす。さんじやうらく中のさうどうなのめならず、ぐぶのくぎやうてん上人もいろをうしなふ。ほくめんのともがらの中には、あまりにさはひで、わうずいをつくものおほかりけり。ほん三ぬの中じやうしげひら、あなおのへんにてほうわうをむかひとりまいらせ、くはんぎよなしたてまつる。かくあらんには御ものまふでも御心にまかすまじきやらんとぞおほせける。まことにはさんもんの大しゆ、平家をついばつせんといふ事もなし。平家又山をせめんといふ事もなかりけり。これあとかたもなき事共なり。ひとへに天まのくるはしとぞ申ける。

じやうの四郎くはんと

五月廿四日かいげんあつて、じゆゑいとがうす。その日ゑちこの國のちう人じやうの四郎すけもち、ゑちこの守ににんず。あにすけながせいきよのあひだ、ふきつなりとてしきりにじゝ申けれども、ちよくめいなればちからにをよばすして、すけもちをながもちとかいみやうす。同九月二日じやうの四郎ながもち、ゑちこではあいづ四ぐんのつはものどもいんそつして、つがうそのせい四まんよき、木そつていばつのためにしなの、國へはつかうす。九月十一日、よこたがはらにちんをとる。木そはこれをきゝ、三千よきにてよだのじやうをいでゝはせむかふ。しなの源氏に、井のうへの九郎みつもりがはかりごとにて、にはかにあかはたを七ながれつくり、三千よきを七につくり、かしこのみね、こゝのほらより、あんないしやなりければ、

あかはたどもをてゝにさしあげくよりければ、じやうの四郎これを見て、なにものか此國にも平家のかたふどする人がありける、力つきぬよとて、いきみのゝしるところに、しだいにちかふなりければ、あひづをさだめて七てがひとつになる。三千よきしよにときをどつとぞつくりける。よういしたるしらはたさつとさしあげたり。ゑちございども、かたきは何十まんぎという事かあらん。いかにもかなふまじとていろをうしなふ。にはかにふためき、あるひはかほをひいれ、あるひはあくしよにをひおとされ、たすかるものはすくなふ、うたるゝものぞおほかりける。じやうの四郎たのみきつたるゑちこの山のゝ太郎、あいづのじうたんばうなんどいひけるつはものども、そこにてみなうたれぬ。わがみもからきいのちいきて、かはをつたつてゑちこの國へひきしりぞく。

同十六日みやこにはこれをことゝもしたまはず、さきのう大しやうむねもりのきやう、大なごんにげんぢやくして、十月十三日ない大じんになり給ふ。同七日にいはひ申けり。たうけたけのくぎやう十二人こしうせらる。くらんどのとう以下てん上人十六人せんぐす。とうごくほつくくに源氏どもはちのごとくにおこりあひ、たゞ今みやこへせめのぼらんとするところに、なみのたつやらん、風のふくやらん、しらざるていにて、かやうにはなやかなりし事ども、なかゝいふがひなくぞ見えたる。さるほどにじゆゑいも二年になりにけり。

平家卷第七

三二四

平家となみしほさからくきよ

第六十一句

平家ほつくくげこう

三二六

第六十四句

さねもり

三三六

とばのぬんてうきんのぎやうがう

平家しのはらおち

よりともよしなかわよの事

むさしの三郎さへもんありくにうちじ

木そとじやうの四郎とかつせん

に
くびじつけん

平家ゆくみちのらうぜき

さねもりにしきのはかまの事

第六十二句

ひうちかつせん

三二八

第六十五句

げんばうのさた

三三九

へいせんじのちやうり心がはり

ひだのかみかげいゑおもひじにの事

ひうちがじやうらくきよ

いせぎやうがう

平家となみしほさかのちん

だざいのせうにひろつぐくはんぜをん

平家と木そとかつせん

じくやう

第六十三句

木そのぐはんじよ

三三一

第六十六句

よしなちうじやう

三四一

よしなかはにふのちん

木そゑちこのこふにてかつせんひやう

はとのさた

ぎ

かくめいぐはんじよの事

さんもんしゆとのせんぎ

へんちうの事

第六十七句

へいけ一もんぐはんじよ……………三四六

第七十句

へいけ一もんみやこおち……………三六一

平家さんもんしゆとけいさくの事

ぐはんじよししたゝめつかはす事

平家へいぜいしんりよをそむく事

しゆとへいけをきよゆうせざる事

第六十八句

ほうわうくらまおち……………三四九

平家うちせたのてたいさんの事

かすが大みやう神どうじすがたとげん

じたまふ事

さつまのかみしんぜいのきやうたいめ

んの事

せんざいしうのさた

第六十九句

これもりみやこおち……………三五九

きたのかたあひべつの事

わか君ひめきみあひべつの事

さいとう五さいとう六あいべつの事

へいけ一もんいへはうくはの事

いけの大なごん心がはりの事

ひごのかみさだよしふるまひの事

ふくはらきうと一しゆくゝの事

平家卷第七

平家ほつこくげかう

じゆゑい二年二月廿二日、しゆじやうはてうきんのためにほうぢうじどのへぎやうがうなる。とばのめん六さいにててうきんのぎやうがうあり。そのれいとぞきこえし。同廿三日むねもりじう一ぬし給ふ。同廿七日ない大じんをじゝ申さる。これはひやううらんのためなり。なんとほつ京の大しゆ、くま野、きんぼうせんのそうと、いせ大じんぐうにいたるまで、一かう平家をそむきげんじに心をつうじけり。四はうへせんじをなしくだし、しよこくへめんぜんをつかはすも、みな平家の下ちとのみ心ゑて、したがひつくものなかりけり。そのころ木そとひやう衛のすけとふくはいの事いできたる。ひやう衛のすけ木そをうたんとて、六万よきをあひぐして、しなのゝ國へはつかうす。木そこれをきき、めのとのいま井の四郎かねひらをもつて、なにゝよつてかよしなかをうたんとは候やらん。たゞし十郎くらんどどのこそ、それをうらむる事あつて、これにおはしたるを、よし中さへなさけなくもてなし申さん事いかんぞや。さればたうじはうちつれてこそ候へ。此ほかあしゆあるべしともおぼえず。なにゆへこん日みやう日中ちがはれたてまつり、かつせんし、平家にわらはれんとはぞんずべく候といひやりければ、ひやう衛のすけ、いまこそかくはの給へ共、よりともうたるべきよし、たしかにはかりごとをめぐらされけるとこそうけたまはれ。それによるまじとて、うちのいちんをさしむけられければ、木そ

よしもと一義重（覺一本）

しんじつにいしゆなきよしをあらはさんがために、ちやくししみづのくはんじやよしもとて、しやうねん十一さいになるこくはんじやに、うみの、もみ月、すは、ふぢきはいげのつはもの共、そのほかあまたつけて、ひやうゑのすけのもとへつかはす。ひやう衛のすけ、此うへはいしゆなしとて、しみづのくはんじやあひぐして、かまくらへこそかへられけれ。木そはやがてゑちごへうちこえて、じやうの四郎とかつせんす。いかにもしてうちとらんとしけれども、ながもちしうぐゝ五きにうちなされ、ゆきかたしらずぞおちにける。ゑちごの國をはじめて、ほくらくだうのつはものみな木そにしたがひつく。木そはどうせんほくらくりやうだうをうちしたがへて、たゞいまみやこへせめ入べしとぞきこえける。平家はこんねんよりもみやうねんはむまのくさかひにつけて、かつせんすべきとひろうせられたりければ、なんかいさいかい、さんいんさんやうのつはものども、うんかのごとくにはせのぼる。とうかいだうにも、とをたふみの國よりひがしこそまいらざれ、さがみの國のちう人またの、五郎かげひさ、いづの國のちう人いとう九郎すけずみ、むさしの國のちう人なが井のさいとうべつたうさねもりは、平家のかたにぞ候ひける。とうせんだうにも、あふみみのひだのものまいりたり。

平家まづぼつこくへうちてをつかはすべきひやうちやうあり。すでにうちてをつかはす。大しやうぐんにはこまつの三ゐの中じやうこれもり、ふくしやうぐんにはゑちぜんの三ゐみち盛、こまつのせうしやうありもり、たんごのじゝうたゞふさ、さまのかみゆきもり、くはうごぐうのすけつねまさ、さつまのかみたゞのり、のとかみのりつね、みかはのかみとものり、さぶ

こまつのせうしやう以下覺一本にない人名を多く載せる。

どうさん―逃散。

らい大しやうには、かづさの太郎はんぐはんだゞつな、ひだの大夫はんぐはんかげたか、かはちのはんぐはんすゑくに、たかはしのはんぐはんながつな、ゑつ中のせんじもりとし、同三郎ひやうゑもりつぐ、むさしの三郎ざゑもんありくに、またの、五郎かげひさ、いとう九郎すけずみ、ながゐのさいとうべつたうさねもり、あく七びやうゑかげきよをさきとして、つがうそのせい十まんよき、じゆゑい二ねん四月十七日のむまのこくにみやこをたつて、ほつこくへぞおもむきける。平家はかたみちをたまはつてければ、あふさかのせきよりはじめて、みちにもちあふけんもんせいかのしやうぜいくはんもつともいはず、いちくゝにうばひとる。ましてしが、からさき、まの、たかつ、しほづ、かいづのへんをいちくゝについぶくしてとをりければ、にんみんおほくちうさんす。

ひうちかつせん

木そよしなかわがみはしなのにありながら、ゑちぜんの國ひうちがじやうをぞかまゑける。大しやうぐんにはへいせんじのちやうりさいめいゐぎし、いなづのしんすけ、さいとう太、はやしの六郎みつあきら、とがしのにう道ぶつせい、にうぜん、みやざき、いしぐろをさきとして、七千よきぞこもりける。さるほどに平家のせんぢんは、ゑちぜんの國きのべ山をうちこえて、ひうちがじやうへぞよせられける。此じやうのありさまを見るに、ばんじやくそばだちて四はうのみねをつらねたり。山をうしろに(し)、山をまへにあつ。じやうのまへにはのうみが

ひうちかつせん―この
前にある。本書は諸
の一章がある。本
巻五のふじかはの
中に入る。百二十
の一本はここに入る。

は、しんどうがはとて、二つのかはながれたり。二つのかはのおちあひに、大ぼくをたてゝしがらみをかき、せきあげたれば、水とうざいの山のねにさしみちて、ひとへに大かいにのぞむがごとし。かげなんさんをひたしてあをふしてくはうやうたり。なみせいじつをしづめてくれなみにしてゑんりんたり。こんめいちのありさまも、これにはいかでかまざるべき。平家はむかへの山にしゆくし、むなしく日かずををくる。じやうのうちの大しやうぐん、へいせんじのちやうりさいめいぬぎし、心がはりして、しうそくをかきて、ひきめのなかにこめて、しのびやかに、山のねをつたへて、平家のちんへぞいゝれたる。此ひきめのならぬこそあやしけれど、とつてこれを見るに、なかにふみあり。ひらひて見れば、かのかはゝわうこのふちにあらず、一たんのしがらみをかきあげたる水なり。いそぎざう人どもつかはして、しがらみをきりやぶらせ給へ。山かはなれば水はほどなくおちんずらむ。むまのあしだちよく候へば、いそぎわたさせ給へ。うしろやはいてまいらせん。へいせんじのちやうり、さいめいぬぎしが申じやうとぞかひたりける。大しやうぐん、ふくしやうぐん大きによるこんで、やがてざう人どもをつかはし、しがらみをきりやぶらせらる。あんのごとく山かはなれば、水はほどなくおちにけり。そのとき平家の大ぜいさつとわたす。さいめいぬぎしは、やがて平家と一ツになつてちうをいたす。いなづのしんすけ、さいとうだ、にふぜん、みやぎき、これらはみなしばしたゝかひ、じかうをおちてかゞの國へぞひきしりぞく。平家やがてかゞの國へうちこえて、はやしとがしが二かしよのじやうくはくををひおとす。さらにおもてをむくべしとも見えざりけり。み

からめて……以下盤一
本と差異が著しい。

やこにはこれをきゝ、よろこぶ事かぎりなし。同五月八日平家はかゞの國しのはらにてせいぞろひして、それよりぐんぴやうをふたてにわけて、大しやうぐんにはこまつの三ぬの中將これより、ふくしやうぐんにはぬちぜんの三ぬみちもり、せんちんはぬつ中のせんじもりとし、つがうそのせい七まんよき、かゞとぬつ中とのさかひなるとなみ山へぞむかはれける。からめての大しやうぐんにはさまのかみゆきもり、さつまのかみたゞのり、三まんよきに、のとゝぬつ中とのさかひなるしほざかへこそかけられけれ。さるほどに木そのくはんじやよしなか、ぬちこのこくふより五まんよきにてはせむかふ。さきに十郎くらんどゆきいぬを大しやうぐんにて、一まんよきをひきわけて、しほざかてへさしむけらる。のこるところの四まんよきをてゝにわかつ。そうじて七てにわかたれたり。木その給ひけるは、平家はだぜいにてくだるなり。山うちこえて、くろざかのすその、まつざかのやなぎはら、ぐみの木ばやしのひろみへいづるものならば、はしりあひのかつせんにてこそあらんすれば、はせあひのかつせんは、いかにもせいのおほくすくなきによる事なり。だぜいかさにかけられてはかなふまじ。からめてをまはせやとて、たての六郎ちかたゞ七千よきにてきたくろざかへまはる。にしな、たかなし、やまだの次郎七千よきにてみなみくろざかへむかふ。わがみは大てより一まんよき、又一まんよきをばまつざかのやなぎはらにひきかくし、いま井の四郎かねひら六千よきにてわしのしまをうちわたり、ひのみやばやしにちんをとる。木その給ひけるは、此せいくろざかにむかはん事は、はるか事ぞ。さあらんほどに平家のだぜい山よりこなたへこえなんぞ。せいはむかはず

とも、はたをさきにたつる物ならば、源氏のせんちんむかふたりとて、山よりあなたへひかんとす。はたをさきにたてよとて、せいはむかはねども、くろざかのうへに、しらはた三十ながればかりうちたてたり。あんのごとく平家これを見て、あはやげんじのせんちんすでにむかひてんげり。こゝは山もたかし、たにもふかし、四はうはがんせきなり。からめてたやすくはよもまはらじ。むまのくさかい、水かひとにもよげなり。むまやすめんとて、大ぜいみな山の中にぞおりあたる。

木そのぐはんじよ

木そは八まんのしやりやう、はにふのしやうにちんどつて、きつと四はうを見まはせば、なつ山のみねのみどりの木のまより、あけのたまがきほの見えて、かたそぎづくりのしやだんあり。木そ、これを見給ひて、あんないしやをめして、これはなにのやしるぞ。いかなるかみをあがめたてまつりたるぞとたづねられければ、これは八まんをうつししまいらせて、たうごくにはいまやはたどこそ申候へ。木そおほきによろこんで、てかきにぐせられたる木その大夫かくめいをよびて、よしなかこそさいわいに八まんの御ほうぜんにちかづきたてまつりて、かつせんをとげんずるなれば、それにつみてかつうはこうだいのため、かつうはたうじのきたうのため、ぐはんじよを一ふでかひてまゐらせばやとおもふはいかに。もつともしかるべく候とて、むまよりとびおりかゝんとす。かくめいかちんのひたゝれに、くろいとおどしのよろひきて、

さいじうばう―最乗房。
信教。

まだらぼろのやをひ、ぬりごめどうのゆみもちて、くろきむまにぞのつたりける。ゑびらより
こすゞりたゝふがみをとりいだし、木そどの、御まへにひざまづみてぞかひたりける。すせん
のつはものこれを見て、ぶんぶのたつしやかなとぞほめたりける。此かくめいと申は、くはん
がくみんにくらんどみちひろとて候ひけるが、しゆつけして、さいじうばうがしんきうとぞな
のりける。しばしはなんとにありしが、たかくらのみや三井でらにわたらせ給ひしとき、なん
とへちうじやうををくられたり。そのへんちうを、此しんきうぞかいたりける。きよもりはへい
じのさうかう、ぶけのちんかいとかひたりし事、大じやうにう道、大きにかつて、しんきう
ほうしがかうべをはねよとの給ふあふだ、なんとをひそかにのがれいで、ほつこくへおちくだ
り、木そにぞつきたりける。かゝるさい人なれば、なじかはかきもそんずべき。かきあげてぞ
よふだりける。

きみやうちやうらい、八まん大ぼさつは、じちいきてうていのほんじゆ、るいせめいくんの
なうそたり。ほうそをまばらんがため、さうせいをりせんがため、三じんのきんようをあら
はして、三じよのけんぴををしひらく。こゝにきやうねんよりこのかた、平しやうこくとい
ふものあり。四かいをくはんれいして、ばんみんをなうらんせしむ。これはすでにぶつぽう
のあだ、わうぽうのてきなり。よしなかいやしきもきうばのいゑにむまれ、わづかにきけう
のげいをつぐ。かのぼ(う)あくを見るに、しりよをかへりみるにあたはず、うんをてんだ
うにまかせ、身をこくかになげうち、こゝろみにぎへいをおこし、きうきをしりぞげんとほ

きけう―箕裘。

きうき―凶器。

りやうか―兩家。

きかん―機感。

きうと―凶徒。

しぞく―氏族に歸附。

つす。とうせんりやうかのちんをあはすといへ共、しそついまだ一ちんのいさみをえざるの
あひだ、まち／＼心をそれをなすところに、いま一ちんをひて、はたをせんちやうにあげ
て、たちまち三じよわくはうのしやだんをはいし、きかんじゆんじゆく、すでにあきらか
なり。きうとちうりくうたがひなし。くはんぎのなんだをおとし、かつがうきもにそむ。な
かんづくさうそぶ、さきのむつのかみみなものよいいゑのあそん、身をそうべうのしぞく
にきふし、なを八まん太郎とがうしてよりこのかた、そのもんようとして、きぎやうせざる
といふ事なし。よしなかそのこういんとして、かうべをかたぶくる事としひさし。いま此
たいこうをおこして、たとへばゑいじかいをもつてこかいをはかり、たうらがをのをとつ
て、りうしやにむかふがごとし。しかれども國のため、きみのためにこれをおこし、いゑの
ため身のためにこれをおこさざる、心ざしのいたり、しんかんくらからんや。たのもしゑか
な、よろこばしゑかな、ふしてねがはくは、みやうけんゑをくはへ、れいじんちからをあは
せ、かつ事を一じにけつし、あたを四はうにしりぞけ給へ。しかればすなはちたんきみやう
りよにかなひ、ゆうげんかごをなすべくば、まづ一ツのずいさうを見せしめ給へ。じゆゑい
二年五月十一日、みなもとのよしなかうやまつてまうす。

とよみあげて、十三のうはやをそへて御ほうでんにぞおさめける。たのもしひかな、八まん大
ぼさつ、しんじつの心ざしの二ツなきをやはるかにしうらんし給ひけん、くものうちより山ば
と二ツとびきたつて、源氏のしらはたのうへにへんばんす。平家もこれを見て、みな身のけ

しうらん―照覧。

めいてん―明天。

しんくは―神火。

もよだちたり。むかしじんぐうくほうぐうしんらをせめ給ひしに、れいきうめいてんにあらはれ、いくさにかつ事をえ給へり。しかるに此人々のせんぞ、八まん太郎よしゑあうしうのさだたうをついばつせしとき、くりやがはのたちにて、わうじやうのかたにむかひ、はるかに八まんをはいしたてまつりて、これはわたくしのひにあらず、すなはちしんくはなりとてひをはなつ。れいきうほのほのうちにあらはれ、はたのうへにとびめぐる。かやうのせんしうをおもひつゞけて、木そどのかぶとをぬぎ、れいきうをはいし給ひけん心のうちこそたのもしけれ。源平ちんをあはせて、たがひにたてをつきむかふたる、そのあはひ三ちやうにはすぎしとぞ見えし。されども源氏もすゝまず、平家もすゝまず。やゝあつてげんじなにとやおもひけん、せいびやうをすぐり、十五きをいだして、十五のかぶらを平家のちんへぞいゝれたる。平家も十五きいだして、十五のかぶらをいかへす。源氏又三十きいだして三十のかぶらをいさすれば、三十のかぶらをいかへしけり。五十きいだせば、五十きをいだしあはせ、百きをいだせば百きをいだし、りやうはうたてのおもてにすゝんだる。たがひにしうぶをけつせんとすゝめども、げんじのかたには、そうじてせいしてしうぶをせず。源氏はかくあひしらひて日をくらし、夜に入てうしろのたにへをひおとし、ほろぼさんとするをばしらず、平家もともにあひしらひて、日をくらすこそはかなけれ。しだいにくらふなりしかば、からめてのせい一まんよき、平家のちんのうしろなるくりからのだうのへんにてまはりあひ、くりからのだうのまへにて、一まんよきゑびらのほうだてをうちたゝき、天もひゞき地もうごくほどにときをどつとつくる。

木そこれをきゝ、おほてより一まんよきにてときをどつとあはす。まつながのやなぎはらにひきかくしたるが一まんよきにてたゝかふ。いま井の四郎かねひら六千よきにて、ひのみやばより一どにおめひてよせむかふ。せんご四まんぎがときのことゑ、山もかはもたゞ一どにくづるゝかどぞおぼえける。平家は、こゝは山もたかし、たにもふかし、四はうがんせきなり、からめてたやすくよもまはらじとて、うちとけたるところに、おもひもかけぬときにおどろきて、あはてさはぎ、もしやたすかると、そばのたにへぞおとしける。きたなしや、かへせゝといふやからもおほかりけれども、大せいのかたぶきたちぬれば、とつてかへす事なし。さればわれさきにとぞおとしける。おやのおとせば、こもおとす、しうのおとせば、らうどうもつゞく。あにがおとせばおとゝもおとす。むまには人、ひとにはむまおちかさなつて、さしもふかきたに一ツ、平家のせい七まんよきにてぞむづみける。がんせんちをながし、しがいおかをなす。大しやうぐんこれもりばかりからきいのちいきて、かゞの國へひきしりぞく。かづさの太郎はんぐはんたゞつな、ひだの大夫はんぐはんかげたか、かはちのはんぐはんすゑ國、みな此たにゝてぞしにける。そのたにのへんには、やのあな、かたなのあと、いまにあるとぞうけ給はる。いけどりにせられたるものおほかりけり。まづひうちがじやうにて心がはりしたりけるへいせんじのちやうり、さいめあいぎし、平家のさぶらひにきこふるつはもの、びつ中の國のちう人、せのをの太郎かねやす、いけどりにせられにけり。さいめあいぎしいけどりにせられたりときこえしかば、木そどの、これをめしよせ、まへにひきすえ、やがてかうべをはねら

れけり。夜あけてのち、しかるべきもの共三十よ人くびをきりかけて、木そどのの給ひけるは、そもく十郎くらんどがしほのてこそおぼつかなけれ。いざゆきて見んとて、四まんぎが中より、むま人つよきをすぐつて二まんぎ、しほのてにはせむかふ。ゑつ中の國ひみのみなとゝいふところをわたさんとするおりふし、しほさしみちて、ふかさあさゝをしらず、くらをきむまををひいれておよがす。くらづめひたるほどにて、むかへのきしのはたへわたりつく。こはいかに、あさかりけるをとて、大ぜいうちいれてわたす。しほさがへをしよせて見給へば、あんのごとく十郎くらんどはさんぐにいらまされて、ひきしりぞき、こまのあしをやすめおけるところに、木そ、さればこそとて、二まんぎいりかはつて、ときをつくりおめひてかく。平家しばらくこそさゝへけれ、しほのてもをひおとされて、かゞの國しのはらへこそひきしりぞきけれ。

さねもり

しのはら―篠原、以下
篠原台戦は覺一本に比
して甚だ簡略。

同廿三日うのこくにげんじしのはらへをしよせて、むまのこくまでたゝかひけり。ざんじのかつせんに、げんじのつはもの一せんよきうたれぬ。平家がたには、たかはしのはんぐはんながつなをはじめとして、二千よきぞほろびける。平家しのはらをせめおとされておちゆきけり。その中にむさしの三郎ざへもんありくに、なが井のさいとうべつたうさねもりは、大ぜいにはなれて、二きつれてひきかへしたゝかひけり。三郎ざへもんありくには、かたきにむまのはら

をいさせてしきりにはねければ、ゆんづえをつみておりたつたり。かたきのなかにとりこめられて、さんぐにいる。やだねみないつくし、うち物ぬひてたゝかひけるが、や七ツ八ツいたてられて、たちじにゝこそしにけれ。三郎さへもんうたれてのち、なが井のさいとうべつたうさねもり、ぞんずるむねありければ、たゞ一きのこつてぞたゝかひける。しなのの國のちう人、てづかの太郎はせよつて、みかたはみなおちゆくに、たゞ一きのこつて、いくさするこそころにくけれ。たそやおぼつかなし。なのれきかんといひければ、かういふわどのはたそ、まづなのれといはれて、かくいふはしなのの國のちう人、てづかの太郎みつもりぞかしとなる。さいとうべつたう、さる人ありとはきゝをきたり。たゞしわどのをかたきにきらふにはあらず、ぞんずるむねあればいまはなのるまじ。よれくまん、てづかとして、をしならべてくまんとするところに、てづかゞらうどうなかにへだゝつてむずとくむ。さねもりはてづかゞらうどうをとつて、くらのまへわにをしつて、かたなをぬきくびをかゝんとす。てづかはらうどうがくらのまへわにをしつけらるゝを見て、ゆんでよりむずとよせあはせて、さねもりがくさずりたゝみあげて、二かたなさすところに、ゑいごゑあけてくんでおつ。さねもり心はたけけれども、らうむしやなり。てはをふつ、二人のかたきをあひしらふとせしほどに、てづかゞしたになつて、つめにくびをとらる。てづかはをくればせにはせきたるらうどうにさいとうべつたうがものゝぐはがせ、くびもたせ、木そどのゝまへにはせまいり申けるは、みつもりこそこん日きいのくせものにくみてうちとつて候へ。なにとなのれとせめ候ひつれども、つめになのり

候はず、さぶらひかと見れば、にしきのひたゝれをきて候。又大しやうぐんかとおもへば、つゞくせいも候はず、こゑはほんどうごゑにて候ひつると申せば、あはれこれはさいとうべつたうさねもりにてやあらん。たゞしそれならばよしなかとせおさなめに見しかば、すでにしらがかすほなりしぞ。いまはさだめてはくはつにこそあらんするに、びんひげのくろきはあらぬものやらん。ねんらいのとくみなれば見しりたるらんものを、ひぐちめせとて、めされたり。

ひぐちの次郎まいり、さねもりがくびを一め見て、やがてなみだにぞむせびける。いかに／＼とたづねられければ、あなむざんや、さねもりにて候ひけりと申。びんひげのくろきはいかにとの給へば、ひぐちの二郎なみだをしのごひて申けるは、さ候へばこそ、そのやうを申さんとするれば、ふかくのなみだがさきだつて申えず候。ゆみやとる身はあからさまのざせきとはおもふとも、おもひいでになる事を申をくべきにて候ひけるぞや。つねはかねみつにあふてものがたり申せしは、さねもり六十にあまつていくさのばにむかはんには、びんひげをすみにそめてわかやがんとおもふなり。そのゆへはわかとのばらにあらそひて、さきをかけんもおとなげなし。又らうむしやとてあなどられんもくちおしかるべしなんどつねは申候ひしが、こんどをさいごとぞんじてまことにそめて候ひけるむざんさよ。あらはせて御らん候へと申もあへず、又なみだにぞむせびける。さもあらんとてあらはせて見給へば、はくはつにこそあらひなせ。さねもりにしきのひたゝれをこんどきたりける事は、みやこをいでしとき、おほひどのにまいり申けるは、一とせとうごくのいくさにまかりくだり候ひて、するがのかんばらよりや一ツもい

ずしてにげのぼりて候ひし事、らうこのちじよくたゞ此事に候なり。こんどほつこくへむかふ
ならば、としこそよりて候ども、まつきかけてうちじにつかまつらんずるにて候。それにと
つてはさねもりもとはちぜんのものにて候が、きんねんしよりやうにつきて、むさしのなが
井にきよちうせしめ候ひき。ことのたとへの候ひしぞかし。こきやうへはにしきをきてかへる
と申事の候。しかるべくは、さねもりににしきのひたゝれを御ゆるされ候へかしと申ければ、
おほいどの、まことにさるべしとて、にしきのひたゝれをゆるされけるとぞきこえし。むかし
のしゅばいしんは、にしきのたもとをくはいけいざんにひるがへし、いまのさねもりはそのな
をほつこくのちまたにあぐ。

げんばうのきた

平家はさんぬる四月ほつこくにくだりしときは、十まんよきときこえしが、いま五月かへりの
ぼるには、わづかにそのせい三まんよき、さしもはなやかにいでたちてみやこをたちし人々の、
いたづらになをのみのこし、こしちのするのちりとなるこそかなしけれ。にう道のするのこ、
みかはのかみとものもりもうたれ給ひぬ。たゞつな、かげたかもかへらず、するくに、ながつな
もうたれぬ。ながれをつくしてすなざるときは、おほくのうほありといへども、みやうねんに
はうほなし。はやしをやひてかりするときは、おほくのけだものありといへども、みやうね
んにはけだものなしとのちをぞんじて、せう／＼はのこされべきものをと、申人もおほかりけ

り。ひだのかみかげいゑは、さいあいのちやくしかけたかうたれぬときこえしかば、ふししづみてなげきけるが、しきりにいとま申あひだ、おほいどのゆるされけり。やがてしゆつけしてうちふす事十よ日ありて、つゐにおもひじにこそしにけれ。これをはじめとして、おやはこをうたせ、こはおやをうたせ、つまはおつとにをくれて、いゑくにはおめきさけふこそおびたゞし。ほつこくのいくさにうちまけてみやこへかつりのぼりにけり。

六月一日くらんのさゑもんごんのすけさだなか、おほせをうけ給はつて、さいしゆじんぎごんのしう大なかとみのちかとしを、てん上のおりぐちへめされ、ひやうがくをしづめんがために、大じんぐうへぎやうがうなるべきよしおほせくださる。大じんぐうと申は、たかまのほらよりあまくだらせ給ひて、やまとの國かさぬひのさとにまし／＼けるを、十一だいのみかど、すいにん天わう廿五ねん、ひのへたつ三月に、いせの國いすゞのかはかみ、しもついはねに大みやばしらをひろふしきたてゝ、いはひそめたてまつりしよりこのかた、日ばん六十よしう三千七百五十よしやのじんぎみやうだうのうちにはぶさうなり。されどもだい／＼のみかどのりんかうはいまだなかりけり。ならのみかどの御とき、さ大じんふひとうのまゝ、さんぎしきぶぎやうがうのこ、うこんゑのせうしやうけんださいせうにひろつぐといふ人あり。天平十五ねん十月に、ひぜんの國まつらのこほりにして、十まんのきうぞくをかたらひて、こくかをあやぶめんとす。これによつておほのゝあづま人、ひろつぐがうつてにむかふ。そのいのりのためにみかどはじめていせへぎやうがうなるとかや。ひろつぐうれてのち、そのまうりやうあれて、

おそろしき事どもおほかりけり。同天平十八年六月に、ちりぜんの國くはんぜをんじくやうせらる。だうしにはげんばうそうじやうしやうぜらる。すでにかうざにのほり、ひうびやくのかねうちならして候とき、にはかになるかみおびたゞしくなつて、げんばうのうへにおちかゝつて、そのかうべをとり、うんちうへぞいりにける。おそろしなんどもおろかなり。これはげんばうそうじやうひろつぐをちうぶくしたりけるによつてなり。これによつてかのりやうをうやまひ、まつらのかゞみのみやとがうす。此そうじやうは、きびの大じんにつたうのとき、ほつさうじうをわたされし人なり。たうじんげんばうといふなをなんじて、げんばうとはかへつてほろぶといふこゑあり。いかさまにもきてうのゝち、ことにあふべき人なりと申たりとかや。そのゝちなか一ねんあつて、されたるかうべにげんばうといふめいをかいて、こうぶくじにそらよりおとし、どつとわらふこゑありけり。おそろしかりし事どもなり。さがの天わうの御とき、へいぜいのせんてい、ないしのかみのすゝめによつて、世をみだり給ひしその御いのりには、みかど第三のひめみやをかもさいみんにたてまいらせ給ひけり。しゆじやくみんの御とき、まさかどすみともひやうらの御いのりに、やはたのりんじのさいれいはじめらる。かやうの事どもをれいとして、さまぐの御いのり共はじめられけり。

よしなかちうじやう

井のうへ以下の人名
聲一本になし。

木そはゑちぜんのこうにつみて、かつせんのかやうぢやうあり。井のうへ九郎、たかなしのく

はんじや、山だの次郎、にしなの二郎、ながせのはんぐはんたい、あかつまのはんぐはんたい、ひぐちの次郎、いま井の四郎、たての六郎、ねの井のこやたいげ、しかるべきものども百人ばかりまへになみあたりけるにむかつて、木その給ひけるは、そもくわれらみやこにのぼらんずるに、あふみの國をへてこそこのぼらんずるに、れいの山ほううのにくさは又ふせぐ事もやあらんずらむ。けやぶつてとをらん事はやすけれども、平家こそたうじはぶつぼうをほろぼし、そうをもうしなへ、それをしゆごのためにじやうらくせんずるものが、大しゆにむかつてかつせんをせんずる事、すこしもちがはざる二のまひなるべし。これこそやす大じの事なれ。いかにせんとぞの給ひける。木その太夫かくめいすゝみいで、申けるは、さん候。しゆとは三千人にて候。ひつちやう一みどうしんなる事は候はじ。みなおもひくにてこそ候はんずれ。まづちうじやうををくりて御らん候へ。ことのやうはへんちうに見え候はんずらん。さらばかけとて、かくめいにちうじやうをかゝせて、さんもんへこそをくられけれ。

よしなかつらく平家のおくぎやうを見るに、ほうげん平治よりこのかた、ながくじんしんのれいをうしなふ。しかりといへども、きせんでをつかね、しそあしをいたゞく。ほしいまゝにていぬをしんだいし、あくまで、こくぐんをりよりよつす。だうりひりをろんぜず、けんもんせいかをついぶくし、うざいむざいをいはず、きやうしやうじしんをそんまうす。そのしざいをうばひとり、ことくくろうじうにあたへ、かのしやうゑんをもつしゆし、みだれがはしくしそんにはぶく。なかんづく、さんぬるぢしう三年十一月、ほうわうをせいなん

なんせい―南城。

ふうわうじやう―鳳凰城。

しうす―消す。

ほうぶん―風聞。

のりきうにうつしたてまつり、はくろくをぜついきにながしたてまつる。しかのみならず同四年五月に、二のみやのしゆかくをかこみたてまつり、こゝのえのこうちんをおどろかしむ。ここにていしひぶんのがいをのがれんがために、をんじやうじにじゆぎよのとき、よしなかせん日にれいしを給るによつて、むちをあげんとほつするところに、おんできちまたにみち、よさんみちをうしなふ。きんきやうの源氏なをさんこうせず、いはんやゑんきやうにをひてをや。しかるにをんじやうじはぶんげんなきによつて、なんせいにおもむかしめ給ふのあひだ、うちばしにをひてかつせんす。大しやう三ゐにう道のふしめいをかろんじ、ぎをおもんじ、一せんのをはげますといへども、たぜいのせめをまぬかれず、かばねをりうもんげん上に（む）づみ、なをふうわうじやうにほどこす。れいしのおもむききもにめいじ、どうるいのかなしみたましぬをしうす。これによつてとうごくほつこくのげんじら、をのくさんらくをくはだて、平家をほろぼさんとほつす。そのしゆくいをたつせんがために、きよねんのあきはたをあげ、つるぎをとつてしなのをいでしとき、ゑちごの國のぢう人、じやうの四郎ながもち、すまんのぐんびやうをめしぐし、はつかうせしむるのあひだ、たうごくよこたがはにをひてかつせんす。よしなかわづかに三千よきをもつて、かの二まんのつはものをやぶりはんぬ。ほうぶんひろきにをよんで、平氏の大しやう十まんのぐんしゆをほくろくにはつかうす。ゑつしう。か（し）うのとなみ、くろざか、しほざか、しのはらいげのじやうくはくにをひて、すかどのかつせん、はかりごとをいばくのうちにめぐら

し、かつ事をしせきのもとにえたり。しかればうてばかならずよくし、せむればかならずかうす。たとへばあきの風のぼせを、やぶるにことならず、ふゆのしものくんゆをからすにあひおなじ。これひとへにしんめいぶつだのたすけなり。さらによしなががふりやくにあらす。平氏はいぼくのうへは、さんらくをくはだゝんとなり。いまはえいがくのふもとをすぎ、らくやうのちまたにいるべし。此ときにあたつてひそかにぎたいあり。天だいのしゆとは、平家にどうしんせんか、げんじによりきせんか、もしかのあくどをたすけば、しゆとにむかつてかつせんすべし。もしかつせんをいたさば、えいがくのめつぼうくびすをめぐらすべからず。かなしきかなや、平氏しんきんをなやまし、ぶつぼうをほろぼすのあひだ、かのあくぎやうをしづめんがために、ぎへいをおこすところに、たちまちに三千のしゆとにむかつてふりよのかつせんいたさん事、いたましきかなや、いわうさんわうにはぐかりたてまつて、ぎやうていにとりうせしめば、てうていくはんたいのしんとなつて、ふりやくのかきんのそしりをのこさん。みだれがはしくしんだいにまよいて、あんないをけいするところなり。こひねがはくは、三千のしゆとをのくしりよをめぐらし、かみのためほとけのため、くにのためきみのため、源氏にどうしんし、きうとをちうし、くうくはをよくせん。こんたんのいたりにたえず。よしなかけうくはううやまつてまうす。じゆゑい二年六月日、しん上ゑくはうりつし御ばう。

ぎやうてい一行程。

くうくは——鴻化。

とぞかいたりける。さんもんにはこれをひけんし、せんぎまちくなり。あるひは平家にどう

しんせんといふしゆともあり、あるひは源氏につかんといふ大しゆもあり。おもひ／＼のいぎさま／＼なり。らうそうどの申けるは、われらもつばらきんりんしやうわう、てんちやうちきうをいのりたてまつる。たうだいの平家は御ぐはいせきにてまします。さればいまにぬたるまで、かのはんじやうをきせいす。されどもあくぎやうはうにすぎ、ばんにんこれをそむけり。うちてをくに／＼へつかはすといへども、かへつていづくのためにほろぼさる。源氏はきんねんよりどゞかつせんにうちかつて、うんめいひらけなんとす。なんぞしゆくうんつきぬる平家にどうしんして、うんめいをひらくげんじをそむかんや。平家ちぐのぎをひるがへして、源氏がうりよくの心にふくすべきのよし、いちみどうしんにせんぎして、やがてちうじやうををくる。そのことばにいはく、

いしつ―参悉。

ゆうけつ―大藥。天逆
(覺一本)。

きぼ―規模。奇謀か。

六月十日のちうじやう、同十六日たうらい、ひゑつのところに、すじつのうつねん一じにかいさんす。をよそ平家のあくぎやうるいねんにをよんで、てうていのさうどうやむときなし。ことじんこうにあり、いしつするにあたはず。それゑいがくにいたつて、ていとどうぼくのじんしとして、こくかせいひつのきせいをいたす。しかるを一天ひさしくかのゆうけつにおかされて、四かいとこしなへにそのあんぜんをえず。けんみつのほうりんなきがごとし。おうこのしんいしは／＼すたる。きけたま／＼るいだいぶびのいゑにむまれて、さいはいにたうじせいせんのじんたり。あらかじめきぼをめぐらし、たちまちにぎへいをおこす。ばんしのめいをわすれて、一せんのこうをたつ。そのいたはりいまだりやうねんをすぎざるに、そのな

さだめて一缺か。定めて
 教法の再び榮えんこと
 とを喜び、崇敬の舊き
 に復せん（覺一本）

すでに七だうにほどこす。わが山のしゆと、かつ／＼もつてじうゑつす。こくかのため、
 （る）いかのため、ぶこうをかんじ、ぶりやくをかんず。かくのごとくなるときんば、さん
 上せいきむなしからざる事をよろこび、かいだいゑいこのおこたりなき事をしらん。じゝた
 じ、じやうぢうのぶつぼう、ほんじやまつしや、さいてんのしんめい、さだめてふくせん事
 をずいきし給はん。しゆとしん中、たゞけんさつをたれ給へ。しかればすなはち、みやうに
 十二じんしやう、かたじけなくもいわうぜんせいとししやとして、きうぞくついばつのゆう
 しにあひくはゝり、けんには三千のしゆと、しばらくしゆがくさんぎやうのきんせつをやめ
 て、あくりよちばつのくはんぐんをたすけしむ。しくほん十じうのぼんふうは、かんりよを
 わてうのほかにほらひ、ゆが三みつのほううは、しぞくをぎうねんのむかしにかへす。しゆ
 ぎかくのごとし。つら／＼これをさつせよ。じゆゑい二年六月日
 とぞかひたりける。

へいけ一もんぐはんじよ

平家これをしらずして、こうぶくをんじやうじは、いきどをりふかきおりふしなり。かたらふ
 ともよもなびかじ。さんもんはたうけのためにふちうをぞんぜず。たうけも又さんもんのため
 にあたをむすばず。さんわう大しにきせいして、三千のしゆとかたらひとらんとて、一もんの
 くぎやうどうしんのぐはんじよをかひて、さんもんにをくる。ぐはんじよにいはく、

うやまつて申、ゑんりやくじをもつてきえしてうちでらとじゆんじ、日よしのやしろをもつてそんきやうしてうちやしろのごとくにす。一かう天だいのぶつぼうをあふぐべき事、

みぎたうけ一ぞくのとまがらまことにきせいあり。しいしゆいかんとなれば、それゑいざんは、くはむ天わうの御う、でんげう大し、につたうきてうのゝち、ゑんどんのけうぼうを此所にひろむ。しやな的大かいをそのうちにつたへしよりこのかた、もつばらぶつぼうはんじやうのれいくつたり。ひさしくちんごこくかのだうぢやうにそなはり、まさにいまいづの國の人、さきのひやうへのすけ、みなもとのよりとも、身のとがをくひせず、かへつてうけんをあざけり、しかるにかんぼうにくみし、どうしんいたすげんじら、ゆきいゑ、よしなかいげたうをむすんできずあり。りんきやうをんきやうすこくをせうりやうし、どぎどこうばんもつあふりやうす。これによつてかつうはるいだいくんこうのあとををひ、かつうはたうじきうばのげいにまかせ、すみやかにぞくとをついばつし、きうとをがうぶくすべきよし、かたじけなくもちよくめいをふくみ、しきりにせいばつをくはだつ。こゝにぎよりんくはくよくのちんのくはんぐんりをえず、せいばうでんげきのいきをひ、げきるいかつにのるにたり。もししんめいぶつだのかひにあらずんば、いかでかほんぎやくのきうらんをしづめん。こゝをもつて一かう天だいのぶつぼうにきし、ふたいに日よしのしんりよをたのむらくのみ。いかにいはんや、かたじけなくも、しんらのなうそをおもへば、ほんぐはんのよゑいといつべし。いよくそうちうすべし。いよくくぎやうすべし。じこんいごさんもんによるこび

こゝをもつて一たのむらくのみ一覺一本なふたい―不退。

あらば一ものよろこびとせん。しやけにつゝしみあらば、一けのつゝしみとせん。ぜんにつきあくにつき、よろこびとなしうれひとなさん。をのくしそんにつたへてながくしつたせじ。とうじはかすがのやしちをもつてうぢやしとし、こうぶくじをもつてうぢてらとがうす。ひさしくほつさう大じうのしうにきす。へいじは日よしのやしち、ゑんりやくじをもつてうぢでらうぢやしとせん。ゑんじつとんごのけうにちぐせんや。かれはむかしのゆいせきなり。いゑのためにゑいかうをおもふ。これはいまのせいきなり。たみのためついはつをこふ。あふぎねがはくは、さんわう大し、とうざいまんさんのごほうのしやうじゆ、十二大ぐはん、につくはう月くはう、いわうぜんせい、十二じんしや(う)、む二のたんぜいをてらし、ゆい一げんおうをたれ給へ。しかればすなはち、じやぼうぎやくしんのぞく、(て)をぐんもんにつかね、ぼうぎやくざんがいのともがら、かうべを京とにつたへん。われらがこせいのぶつしんあになんぞすてんや。たうけのくぎやうら、いくどうをんにらいをなし、きせいくだんのごとし。じゆゑい二年七月日。

じゆ三ゐのぎやうけんゑちぜんのかみ平のあそんみちもり

じゆ三ゐのぎやうけんうこんゑの中じやう平のあそんすけもり

正三ゐのぎやううこんゑの中將けんいよの守平のあそんこれもり

正三ゐのぎやうさこんゑの中將けんはりまの守平のあそんしげひら

さんぎ上三ゐくはう大ごうごんのたゆうけんしゆりの大夫かゝゑつ中のかみ平のあ

そんつねもり

じゆ二めのぎやう中なごんけんさひやう衛のかみせいぬ大しやうぐんだひらのあそん

ともゝり

じゆ二ぬごん中なごんけんむつではあさつし平のあそんよりもり

じゆ一ぬない大じん平のあそんむねもり

うやまつてまうす。

とぞかゝれたる。くはんじゆこれをあはれみ給ひ、やがてもひろうせられず。十ぜんじの御てんにこめて、三日かちしてのちひろうせらる。はじめはありとも見えざりつる一しゆのうた、ぐはんじよのうはまきにいできたり。

たひらかにはなさくやどもしふればにしへかたぶく月とこそなれ

さんわう大しあはれみをたれ給へ。三千の大しゆちからをあはせよとなり。されどもとしごろ日ごろのふるまひ、しんりよをそむき、人のぞみにもちがひければ、いのれどもかなはず、かたらへどもなびかず。大しゆこれを見て、まことにさこそとはあはれみけれども、すでに源氏にどうしんのへんちうををくるうへは、そのぎあらたむる(に)をよばず。きよゆうする大しゆもなかりけり。

ほうわうくらまおち

同廿日ひごのかみさだよし、ちんせいのむほんたひらげ、きくち、はらだ、まつらたうをさきとして、三千よきをあひぐし、みやこへまいりけり。さいこくばかりはわづかにたひらげたれ共、とうごくほつこくのげんじ、いかにもしづまらず。同廿二日夜はんばかりに、六はらのへん、大ちをうちかへしたるごとくにさはぎあへり。むまにくらをき、はるびしめ、ものゝぐとうざいにはこびかくしあふ。あけてのちきこえしは、みのゝ源氏にさどのうゑもんのじうしげさだといふものあり。これは一とせほうげんのかつせんに、八郎ためともがいくさにまけておちゆきけるを、からめまいらせたりしくんこうに、ゑもんのじうになりたり。八郎からめとるとて、げんじどもにくまれて、きんねん平家をへつらひけるが、やはんばかりに、はせまいつて、木そすであふみの國にみだれ入、そのせい五まんよき、ひがしきかもとにみちくつて、人をもとをさす、らうどうにたての六郎ちかたゞ、木その大夫かくめい、六千よき天だいさんにせめのぼり、そうちあんをじやうくはくとす。大しゆみなどうしんして、たゞいまみやこにせめ入と申たりけるゆへとかや。平家これをふせがんがために、せたへはしん中なごんともゝり、三ゐの中將しげひら、三千よきにてむかはれけり。うぢへはゑちぜん三ゐみちもり、のとかみのりつね、三千よきくだられけり。さるほどに十郎くらんどゆきいゑ、一まんよきにてうちよりいるといふ。あしかゞやたのはんぐはんだい五千よきにて、たんばの國大江山をへて京へいるといふ。つの國かはちの源氏はおなじくちからをあはせて、よどがはじりよりせめ入べしとぞのゝしりける。平家これをきゝて、こはいかゞすべき、たゞ一しよにていか

にもならんとて、うぢせたのををみなよびぞかへされける。ていとまうりのち、にはとりななひてやすき心なし。おさまれるよだにもかくのごとし。いはんやみだるゝよにをひてをや。よし野山のおくへもいらなばやとはおもへども、しよこく七だうことくみだれぬ。いづれのうらかおだやかなるべし。三がいむあん、ゆによくはたと、によらいのきんげん、一じうのめうもんなれば、なじかはすこしもがふべき。

同廿四日さよふくるほどに、さきのない大じんむねもり、けんれいもんゐんの六はらのいけどのにわたらせ給ひけるにまいりて申されけるは、此よのなかのありさまを見たてまつるに、よはすでにかうとこそおぼえて候へ。さればゐんをもうちをもとりまいらせて、さいこくのかたへぎやうがうをまなしまいらせて見ばやとこそおもひなして候へと申させ給へば、女ゐん、ともかくもたゞおほいどのゝはかりごとにこそとぞおほせける。おほい殿もなをいのそでしぼるばかりにて、なくく申されければ、女ゐんもぎよいのたもとにあまる御なみだところせゐてぞ見えさせ給ひける。ほうわうは平家のとりまいらせて、さいこくのかたへおちゆくべしといふ事を、ないくきこしめしてやありけん、うまのかみすけときばかり御ともにて、ひそかに御しよをいでさせ給ひて、くらまのかたへ御かうなる。人これをしらざりけり。平家のさぶらひに、きちないざへもんすへやすといふおのこあり。さかくしきものにて、ゐんにもめしかはれけるが、その夜しもほうぢうじどのへ御とのみして候が、つねに御しよのかた世にさはがしくさゝめきあひて、女ばうたちしのびごゑになきなんどし給へば、こはなに事やらんとお

もひてきくほどに、ほうわうのわたらせ給はぬは、いつかたへ御かうなりたるやらんと申あはるゝこゑにきゝなして、あなあさましやおもひ、いそぎ六はらへはせまいりて、此よしを申せば、おほいどの、いでひが事にぞあるらんと給ひながら、やがてほうぢうじどのへはせまいり見給へば、げにもわたらせ給はず。二あどの、たんばどのいげ、御しよに候はせ給ふ女ばうたち、みなはたらき給はず。いかにやゝと申されけれども、われこそ御ゆくゑしりまいらせたりといふ女ばう一人もおはせず。あくれば七月廿五日なり。御しよにもわたらせ給はずと申ほどこそありけれ、京中のさうどうなのめならず。いはんや平家の人々のあはてさはがれけるありさま、いゑゝにかたきうち入たらんもかぎりあれば、これにはすぎじとぞ見えし。曰ごろはめんもうちをもとりまいらせ、御かうをもぎやうがうをもなしたてまつらんとはからはれたりけれ共、かやうにほうわうのすてさせましゝしかば、たのむ木のもとにあめのたままらぬ心ちをぞせられける。さてはぎやうがうばかりなりともなしたてまつれど、廿五日のうのこくばかりに、みこしよせまいらせたりければ、しゅじやう六さいにならせ給ふ。なに心もわたらせ給はず、やがてみこしにめされけり。こくぼけんれいもんあんも、おなじみこしにぞめされける。ないしどころ、しんじ、ほうけんわたしたてまつる。そのほかいんやく、時のふだ、げんざう、すゞかまでもとりぐしたてまつれど、平大なごんげちせられけれども、あまりにあはてゝとりおとす物どもおほかりけり。せつしやうどのもぐぶせさせ給ひたりけるが、どうじのものほどに、びんづらゆふたるどうじの御くるまのまへをはせず御うたあり。

いかにせんふちのうらばのかれゆくをたゞはるの日にまかせてや見ん

御くるまのうちを見れたるを御らんずれば、ひだりのかたにかすがといふもんじぞ見えさせ給ひける。これはほつさうおうこのかすがのこんげん、たんかいこの御すゑをまばらせ給ふかどめでたかりし事どもなり。せつしやうどの、大みやうじんの御つげなりとおぼしめされければ、御ともに候しんどうゑもんのぶたかをめして、なにとかおほせられたりけん、御うしかひにきつとめを見あはせられければ、御くるまをやりかへしたてまつる。大みやをのぼりに、きた山のへん、ちそくゐんへいらせ給ふ。これも人しりまいらせず。平大なごんときたゞ、くらのかみのふもと、これ二人ばかりぞいくはんにてぐぶせられたる。そのほかこの衛づかさもかつちうをよろひ、ゆみやをたいしてぐぶす。七でうをにしへ、しゆじやくをみなみへぎやうがうなる。かんでんすでにひらけて、くもとうざいにそびゑ、あかつき月さびしくして、けいめい又いそがはし。一とせみやこうつりとして、にはかにあはたゞしかりしは、かゝるべかりけるせんべうともいまこそおもひあはれけれ。

さつまのかみたゞのりは、いづくよりかひきかへされたりけん、さぶらい五きぐして、五でうの三あしゆんぜいのきやうのしゆく所にうちよりて見給へば、もんこをとちてひらかず。うちをきけば、おち人かへりのぼりたりとて、おびたゞしくさうどうす。もんをたゝけどもあけぬあひだ、これはさつまのかみたゞのりと申ものにて候が、いま一どげんざんにいり申べき事候て、みちよりかへりのぼりて候なり。たとひもんをあけず共、此きはまでたちよらせ給へと

の給へば、三みこれをきゝ、その人ならばくるしかるまじ、いれ申せとて、もんをひらきたいめんある。たゞのりこんちのにしきのひたゝれに、もえぎおどしのよろひをき給へり。さつまのかみの給ひけるは、ねんらい申うけ給はつてのち、いさゝかもおろかにおもひたてまつる事は候はねども、此三四ねんは京とのさはぎ、くにぐのみだれ、しかしながらたうけの身のうへにて候へば、此事どもにつきて、そりやくをぞんぜずといへども、つねにまいりよる事も候はず。されどもせんしうのあるべきよし、うけ給はり候ひしかば、しやうがいのめんぼくに、一しゆの御おんをかふむり候はゞやとぞんじ候ところに、やがて世のみだれいできて、そのさたもなく候ひし事共、一しんのなげきとぞんち候。きみすでにみやこをいでさせ給ひぬ。かばねをさんやにさらさんほかは、こするかたなく候。世しづまりなば、さだめてちよくせんのさた候はんずらん。そのうちに一しゆ御おんをかふむり、くさのかげまでもうれしとぞんち候はゞや。又とをき御まぼりともなりまいらせせしとて、よろひのひきあはせより、まき物一ツとりいだして、しゆんぜいのきやうにたてまつる。三み此まきものちとひらひて見給ひて、かゝるわすれがたみを給りをくなれば、ゆめ／＼そりやくをぞんずまじく候。ちよくせんの事は人はしらず、ぐしんがうけ給はらんをひては、御うたがひあるべからずとの給へば、たゞのり、こんじやうのげんざんこそたゞいまをかざりと申とも、らいせにてはかならずひとつぶつどにまいりあはんとてぞいでられける。さつまのかみかぶとのをしめ、むまのはるびをかため、うちのつて、にしをさしてあゆませゆく。三みはる／＼と見をくりて、たゝれたるところに、さ

つまのかみのこゑとおぼしくて、せんどほどをし、おもひをがんごんのゆふべのくもにはつ
すと、たからかにうちゑいじ給へば、三ゐこれをきひて、なみだをさへて入給ふ。げにも世し
づまつてちよくせんあり。せんざいしうこれなり。その中に、たゞのりのうた一しゆいれられ
たり。心ざしせつなりしかば、あまたもいればやとおもはれけれ共、ちよくかんの人なれば、
みやうじはあらはさず、よみ人しらずとぞ入られける。こきやうの花といふだいにてよまれた
る歌也。

さゞなみやしがのみやこはあれにしをむかしながらの山ざくらかな

そのみすでてうてきとなりしうへは、しさいにをよはずといひながら、くちおしかりし事ど
もなり。

しゆりの大夫つねもりのしそく、くはうごぐうのすけつねまさは、ゆうせうにては、にんわじ
のおむろの御しよに候ひしかば、かくあるさうげきの中にも、御なごりをきつとおもひいだし
て、さぶらい五六きめしぐして、にんわじどのへはせまいり、もんぜんにてむまよりおり、申
いれられけるは、一もんうんつきて、けふすでていとをまかりいで候。うき世におもひのこ
す事としては、たゞきみの御なごりばかりなり。八さいのときまいりはじめ候て、十三にてげん
ぶくつかまつり候しまでは、あひいたはる事の候ひしよりほかは、御まへをたちさる事も候は
ざりしに、けふよりのち、いづれの日いづれのとき、かへりまいるべしとおおぼえざる事こそ、
くちおしふ候へ。いま一たび御まへにまいりて、君をも見まいらせたふ候へども、かつちうを

よろひ、ゆみやをたいして、あらぬさまのよそをひにまかりなりて候へば、はゞかりぞんじ候とぞ申されける。おむろあはれにおぼしめし、たゞそのていをあらためずしてまいれとこそおほせけれ。つねまさその日はあかぢのにしきのひたゝれに、もえぎにほひのよろひきて、ながぶくりんのたちをはき、きりふのやをひ、しげどうのゆみをわきばさみ、かぶとをぬひてたかひぼにかけ、御つぼのしらすにかしこまる。おむろやがて御いであつて、みすたかくまかせ、これへくどめされければ、大ゆかへこそまいられたれ。御びはもちてまいりたり。つねまさこれをとりつぎ、御まへにさしをき、申されけるは、せんねんくだしあづかりて候せいざんもちてまいりて候。あまりになごりはおしふ候へども、さしもわがてうのめいぶつを、いなかのちりになさん事うちおしふ候。もしふしぎにうんめいひらひて、又みやこへたちかへる事候はゞ、そのときこそなをくだしあづかり候はめと、なくく申ければ、おむろあはれにおぼしめし、一しゆの御ゑいかをあそばひてくだされけり。

あかずしてわかるゝきみがなごりをばのちのかたみにつゝみてぞをく

つねまさ御すゞりくだされて、

くれたけのかけひのみづはかはるともなをすみあかぬみやのうちかな

さていとま申ていでられけるに、すはいのどうぎやう、しゆつせしや、ばうくはん、じそうにいたるまで、つねまさのたもとにすがりそでをひかへ、なごりをおしみ、なみだをながさぬはなかりけり。ゆうせうのとき、こじにましませし大なごんのほういんぎやうそんと申は、はむろ

の大なごんみつよりのきやうの御こなり。あまりになごりをおしみて、かつらがはのはたまでうちをくり、さてあるべきならねば、それよりいとまこふてなく／＼わかれ給ふに、ほういんかうぞおもひつらねける。

あはれなりおひ木わかきも山ざくらをくれさきだちはなはのこらじ
つねまさ、へんかに、

たびごろもよな／＼そでをかたしきておもへばわれはとをくゆきなむ

さてまひてもたせられけるあかはた、ざつとさしあげたりければ、かしここゝにひかへまちたてまつるさぶらひども、あはやとはせあつまり、そのせい百きばかりむちをあげ、こまをはやめて、ほどなふぎやうがうにをひつきたてまらせ給ひけり。つねまさ十七のとし、うさのちよくしをうけ給はつてくだられけるに、そのときせいざん給りて、うさへまいり、御でんにむかひたてまつり、ひきよくをだんじ給ひしかば、いつのとききしりなれたる事はなけれども、かたはらの人をしなべて、みどりのそでをぬらしける。しらぬやつまでも、むらさめとはまぎれでき／＼けり。めでたかりし事どもなり。此せいざんと申御びはは、むかしにんみやう天わうの御うに、かしやう三ねんのはる、かもんのかみさだとしとたうのとき、大たうのびはのはかせ、れんしうぶにあふて、かの三きよくをつたへてきてうせしに、そのとき、けんじやう、しゝまる、せいざん、三めんのびはをさうでんしてわたされけり。りうじんやおしみ給ひけん、なみ風はげしかりければ、しゝまるをばかいていにしづむ。いま二めんのびはをわたして、わ

人—みや人(覺)一巻。

がてうのみかどの御たからとす。むらかみのせいだい、おうわのころ、三五夜中のしん月すさまじく、りやうふうさつ／＼たりしやはんに、みかどせいりやうでんにて、けんじやうをあそばされけるときに、かげのごとくなるもの御まへにまいりて、きうにしうしかうじやうにしやうがめでたくつかまつる。みかど御びわをしばらくさしをかせ給ひて、そも／＼なんぢはいかなるものぞ。いづくよりきたれるぞと御たづねあれば、これはむかしのさだとしに三きよくをつたへさせ候ひし大たうのびはのはかせ、れんしうぶと申ものにて候が、三きよくのうち、ひきよくを一きよくのこせるつみによつて、まだうにちんりんつかまつりて候。いま御びわのばちをとたえにきこえはんべるあひだ、さんにうつかまつるところなり。ねがはくは此きよくをきみにさづけたてまつり、ぶつくはぼだいをしうすべきよし申て、御まへにたてられたるせいざんをとつて、てんじゆをひねりて、このきよくをさづけたてまつる。三きよくの中に、しやうげん、せきしやうこれなり。そのゝちはきもしんもをそれさせ給ひて、此びはをあそばしはんべる事もなかりけり。おもむろへまいらせられたりけるを、にんわじのしうかくほうしんわう、つねまさのゆうせうのとき、御さいあいのだうぎやうたるによつて、くだしあづけられたりけるとかや。なつ山のみねのみどりの木のまより、ありあけの月のいでたるを、ばちめんにかゝれたりけるゆへにこそ、せいざんとはつけられけれ。けんじやうにあひをとらぬきだいのめいぶつなり。

これもりみやこおち

その中にこまつの三ゐの中じやうこれもりは、ひごろよりおもひまふけたりし事なれ共、さしあたつてかなしかりけり。此きたのかたと申は、こなかのみかどしん大なごんなりちかのきやうの御むすめなり。此はらに六だい御ぜんとて、十さいにならせ給ふわかぎみします。此人々をくれじとめん／＼にいでたち給へば、三ゐの中將、きたのかたにの給ひけるは、日ごろ申せしやうにこれもりは、一もんの人々につらなつてさいこくへおちゆき候なり。ぐしたてまつらんとおもへども、みちにも源氏どもあひまつなれば、たひらかにとをらん事もかたかるべし。もしいつくのうらにも心やすくおちつきたらんとき、いそぎむかひに人をたてまつらん。又いかならん人にもま見え給へかし。なさけをかけたてまつらん人、みやこのうちになどかなかるべきとの給へば、きたのかたはとかくの返事もし給はず。やがてひきかつぎてぞふし給ふ。三ゐの中將よろひきて、むまひきよせいでんとし給へば、きたのかたなく／＼おきあがり、そでにとりつきて、みやこにはち／＼もは／＼もなし。すてられまいらせてのち、又たれにかはまみゆべき。いかなる人にもま見えよかしなんど、の給ふ事のうらめしさよ。日ごろは御心ざしあさからずおはせしかば、人しれずこそふかくたのもしくおもひしに、いつのまにかはりける心ぞや。おなじ野ばらのつゆともきゑ、おなじそのみくづともならばやなんど、こそちぎりしに、いまはねざめのむつごとも、みないつはりになりけり。せめてわがみ一つならば、すて

られたてまつる身のほどを、おもひしりてもとゞまりなん。おさなきものどもを、たれにゆづり、いかにせよ(と)おもひ給ふ。うらめしふもとゞめ給ふ物かなとて、かつうはしたい、かつうはうらみてなき給ふにぞ、三ゐの中將、せんかたなふぞおもはれる。まことに人は十三、これより十五と申せしより、たがひに見そめ見えそめて、こんねんはすでに十二ねん、ひの中水のそこまでも、ともにいりともにしづみ、かぎりあるわかれぢにも、をくれさきだゝじとこそちぎりしかども、心うきいくさのばにおもむきければ、しらぬたびのそらにて、うきめを見せたてまつらんも心ぐるしかるべし。そのうへこんどはよいも候はねば、むかへをまち給へとこしらゑをかんとし給へば、わかぎみひめぎみ、みすのほかへはしりいでゝ、よろひのそでくさずりにとりつきて、さればこはいづくへとてわたらせ給ふぞや。われもゆかん、われもまいらんとしたひつゝなき給ふにぞ、三ゐの中將、うき世のきづなどはいまこそおもひしられられ。さるほどにしやていしん三ゐの中將、さ中じやう、こまつのせうしやう、たんごのじしう、びつ中のかみ、きやうだい五人、ものうちへ入、ぎやうがうははるかにのびさせ給ひて候ものを。いかにやいまゝでとめんゝに申あはれすゝめられければ、すでにむまにうちのりいで給ひけるが、又大ゆかのきはにうちよせ、ゆみのはずにてみすをぎつとかきあげて、これ御らんぜよ。おきなきもの共があまりにしたひ申候を、けさよりとかふこしらゑをかんとかまつるほどに、ぞんちのほかにちさんつかまつりぬとの給ひもあはずなき給へば、五人の人々もみなよろひのそでをぞぬらされける。さいとう五さいとう六とて、きやうだいあり。あには

十九、おとくは十七になるさぶらひあり。これはさんぬる五月しのはらにてうたれしなが井のさいとうべつたうさね盛がこどもなり。これらは三ゐの中將のむまのみづつきにとりつきて、いつくまでも御ともつかまつるべきよしを申。三ゐの中將、これらにいたくしたはれての給ひけるは、おほくのもの共の中に、なんぢらをとゞむるは、おもふやうがありてとゞむるぞ。すゑまでも六だいがたよりとは、なんぢらこそなるべき物よとて、とゞむるなり。とゞまりたらんは、ぐしたらむよりも、われはなをうれしくおもはんずるぞなんど、こまぐとの給へば、ちからをよばずなみだをさえてとゞまらとんす。きたのかた、日ごろはこれほどになさげなかるべき人とはおもはざりしかとて、ふしまろびてぞなき給ふ。わかぎみも大ゆかにころびいで、こゑをはかりにおめきさけび給ふ。そのこゑもんのほかまできこえければ、三ゐの中將、むまをもすゝめやり給はず、ひかへくぞなかれける。まことに人はけふわかれては、いづれの日いづれのときは、かならずめぐりあふべきとちぎるだにも、そのごをまつはひさしきに、これはけふをかぎりのわかれなれば、そのごをしらぬこそかなしけれ。此こゑぐのみゝのそこにとゞまつて、さいかいのたびのそらまでも、ふく風のこゑ、たつなみのこゑにつめて、たゞいまきくやうにこそおもはれけれ。

へいけ一もんみやこおち

平家みやこをおちゆくに、六はら、いけどの、こまつどの、にし八でうにひをかけたれば、く

くうひ―后妃。

さうきよくふちやう―
薬局齋帳一本。莊香翠
帳（覺一本）。

ろけぶり天にみちて、日のひかりも見えざりけり。あるひはせいしゆりんかうのちなり。ふう
けつむなしくいしずゑをのこし、らんよたゞあとをとゞむ。くうひゆうゑんのみぎりなり。し
うばうのあらしのをとかなしむ。ゑきていのつゆのいろうれふ。さうきよくふちやうのもどひ
なり。よくりんちうしよのくはん、くはいぎよくのぞ、ゑんらのすまひ、たじつのけいゑいを
じゝて、へんじのくはいじんとなれり。いはんやらうじうのほうひつにをひてをや。いはんや
ざう人のおくしやにをひてをや。よゑんのをよぶところ、ざいゝしよゝす十ちやうなり。

きやうごたちまちにほろびて、こそだいのつゆ、けいきよくにうつれり。ほうしんおとろひ
て、こらうなし。かんやうきうのけぶり、へいけいをかくしけんも、かくやとおぼえてあはれ
なり。日ごろはかんこくじかうのけはしきをかたふせしかども、ほくてきのためにこれをやぶ
られ、こうかけいぬのふかきをたのみしかども、とういのためにこれをわたらる。あにはから
んやたちまちにれいぎのみやこをせめいだされ、なくゝむちのさかひに身をよせ、きのふは
うんじやうにあめをふらすひりうたりといへども、けふはてつ中にみづをうしなふこんぎよ
ごとし。むかしはほうげんのはるのはなとさかへ、いまはじゆゑいのおきのみちとおちはて
ぬ。

いけの大なごんよりもりは、いけどのにひをかけおちられるが、なにとかおもはれけん、て
ぜい三百よきひきあふて、あかはたみなぎりすて、とばのきたのもんよりみやこへひきぞかへ
されける。ゑつ中のぜんじもりとし、これを見て、おほいどのに申けるは、いけどのゝとゞま

らせ給ふに、さぶらひどもあまたつきたてまつてとゞまり候。大なごんどのまではをそれに候。さぶらひどもにや一ツいかけ候はゞやと申せば、おほいどの、その事さなくともありなん、ねんらいのぢうおんをわすれて、此ありさまを見はてぬやつばら、とかういふにをよばずとぞの給ひける。さて三ゐの中將はいかにとど給へば、こまつどのゝきんだちは、いまだ一しよも見えさせ給はずと申。さこそあらめとて、いよく心ぼそげにおもはれけり。しん中なごんの給ひけるは、みやこをいでゝいまだ一日だにもへぬに、はや人の心もかはりはてぬ。ましてゆくすゑこそをしはからるれ。たゞみやこのうちにて、いかにもなるべかりつる物をとて、おほいどのゝかたを見やりて、よにもうらめしげにおもはれたり。まことにことはりとおぼえてあはれなり。いけの大なごんは、八でうの女あんのにんわじのときはどのにわたらせ給ひけるにぞまいりこもらせ給ひける。をよそひやうゑのすけ、大な言どのをば、こいけのあま御ぜんのわたらせ給ふとこそおもひまいらせ候へ。よりどもにをひては、いしゆおもひたてまつらず。八まん大ぼさつも御しうらん候へと、たゞくせいごんをもつて申されけり。うちてのつかひのぼるにも、あひかまへていけどののさぶらひどもに、ゆみをひきなんどすなどの給ひけり。かやうの事どもをたのみて、とゞまり給ひけるとかや。なまじみに一もんにははなれぬ。なみにもいそにもかぬ心ちぞせられける。はたけ山しやうじしげよし、をやまだのべつたうありしげ、うつのみやさへもんともつな、これ三人はさんぬるぢしう三年よりめしこめられてありしを、おほいどのばかり、これらがかうべをはねらるべしとの給ひけるを、平大なごんとしん中

なごんと申されけるは、これら百人千人をきらせ給ひて候共、御うんつきさせ給はんのちは、よをとらせ給はん事かたかるべし。國に候なるかれらがさいしども、さこそなげき候らめ。いまや／＼とまち候らんところに、きられたりときこえしかば、いかばかりなげき候はんずらん。これらをばとうごくへかへしつかはさるべしとおぼえ候、とひらに申されければ、おほいどのげにもとて、これら三人をめしよせての給ひけるは、いとまをたぶ。いそぎくだれとの給へば、三人のものどもかしこまつて申けるは、いづくまでもぎやうがうの御ともつかまつるべきよしを申。おほいどの、なんぢらがしきだいはさる事なれども、たましぬはみなどうごくにこそあらんに、ぬけがらばかりさいこくへめしぐすべきやうなし。とく／＼くだるべしとおほせさい三にをよびければ、ちからをよばず、なみだをさへてくだらんとす。これらもさすが甘よねんのしうなれば、わかれのなみだをさへがたし。こまつどの、きんだちたちは、きやうだいそのせい六七百きばかりにて、よどのへんにてぎやうがうにをつつきたてまつり給ひけり。おほいどの、此人々を見つつけ給ひて、ちとちからつき、よにもうれしげにて、いかにやいまゝでとの給へば、三ゐの中將、き候へばこそ、おさなきものどもがけさよりあまりにしたひ候つるを、とかうこしらゑをかんとかまつり候つるほどに、ちさんつかまつりぬと申されければ、おほいどの、などやぐしたてまつり給はぬぞ。いかに心ぐるしくおはすらんとの給へば、三ゐの中將、ゆくすゑとてもたのもしふも候はずとて、とふにつらさのなみだをながされけるぞあはれなり。

おちゆく平家はたれくぞ。さきのない大じんむねも、平大ごんときたゞ、平中なごんのりも、しん中なごんともも、しゆりの大夫つねも、ゑもんのかみきよむね、ほん三ゐの中將しげひら、こまつ三ゐの中將これも、ゑちぜんの三ゐみちも、しん三ゐの中將すけも、てん上（人）には、くらのかみのぶもと、さぬきの中じやうときざね、さ中じやうきよつね、さまのかみゆきも、こまつせうしやうありも、たんごのじうたゞふさ、くはうごぐうのすけつねまさ、さつまのかみたゞのり、のどのかみのりつね、むさしのかみともあきら、びつ中のかみもろも、あはちのかみきよふさ、わかさのかみつねとし、おはりのかみきよさだ、くらんどの太夫なりも、太夫あつも、そうにはほつしうじのしゆぎやうのうゑん、二ゐのそうづせんしん、中なごんのりつしちうくはい、ぎやうじゆばうのあじやりゆうゑん、さぶらひには、じゆりやう、けんびいし、ゑふ、しよし、むねとのもの共百六十人、つがうそのせい七千よき、これは、とうごくほつく、此三四年しよくのかつせんうちもらされてのころとこなり。山ざきのせきどのゐんに、たまのみこしをかきすゑて、おとこ山をふしおがみ、平大なごんときたゞ、なむきみやうちやうらい、正八まん大ぼさつ、しかるべくんば、きみをはじめまいらせて、われらをいま一どみやこへかへしいれさせ給へと、なくく申されけるこそかなしけれ。ひだのかみさだよしは、かはじりにげんじ共がむかふたりときひて、けちらさんとして五百よきはつかうしたりけるが、ひが事なればかへりのぼるほどに、みちにてぎやうがうにまいりあひたてまつり、おほいどのゝ御まへにてむまよりおり、ゆみわきば

さみかしこまつて申けるは、これはいづくへとて御わたり候やらん。さいこくへおちさせ給ひたらばたすからせおはすべきか。おち人とかしこゝにてうちとめられさせ給はんこそくちおしくおぼえ候へ。たゞみやこにてともかくもならせ給はでと申せば、おほいどの、さだよしはいまだしらぬか。源氏すでに天だいさんにせめのぼつて、そうちめんをじやうくはくとし、山ほうしみなよりきして、いまみやこに入といふに、せめてをのゝ身ばかりならばいかにもせん。女めん二ゐどのにうきめを見せたてまつらんも心ぐるしければ、ひとまどもやとおもふぞかしとの給へば、ひごのかみ、さらばさだよしとまたび候へとて、てぜい三百よきひきわかつて、みやこへかへりいり、にし八でうのやけあとに大きくひかせ、一夜しゆくしたりけれ共、かへしいり給ふ平家一人もましまさざりければ、さすが心ばそくやおもひけん、源氏のむまのひづめにかけじとて、こまつ殿のはかほりおこし、あたりのつちかもがはにながさせ、こつをばかうやへをくり、よの中たのもしからずとおもひければ、おもひきりてせいをばこまつの三ゐの中將どのゝ御かたへたてまつり、われはのりかへ一きぐして、うつのみやさへもんともつなにうちつれて、平家とうしろあはせにとうごくへこそおちゆきけれ。

平家はこまつの三ゐの中將これもりのほかは、おほい殿いげみなさいしをぐし、そのほかゆくもとまるもたがひにそでをしぼりけり。夜がれをだにもなげきしに、こうくはいそのごをしらず、さいしをすてゝぞおちゆきける。さうでんふだいのよしみ、としごろのちうおんいかでかわするべきなれば、わかきもおひたるも、たゞうしろをのみかへりみて、さらにさきへはすゝ

まざりけり。をのくうしろをかへりみて、みやこのかたはかすめるそらの心ちして、けぶりのみ心ぼくぞたちのぼる。その中に、しゆりの大夫つねもり、みやこをかへり見給ひて、なくくかうぞの給ひける。

ふるさとをやけ野のはらとかへりみてすゑもけぶりのなみちをぞゆく

さつまのかみたゞのり、

はかなしやぬしはくも井にわかるればあとにけぶりとたちのぼるかな

まことにふるさとをば一べんのゑんぢんにへだて、ぜんとばんりのくもちにおもむき給ひけん、人々の心のうちこそかなしけれ。ならばぬいすべてのなみまくら、八えのしほちに日をくらし、いりえこぎゆくかいのしづく、おつるなみだにあらそひて、たもともさらにほしあへず。

こまにむちうつ人もあり。あるひはふねにさほさすものもあり。おもひくくこころくにおちぞゆく。ふくはらのきうとにつめて、おほいどのしかるべきさぶらひども、三百よ人めしあつめての給ひけるは、しやくぜんのよけいいゑにつき、しやくあくのよあふ身にをよぶ。かるがゆへにしゆくほうつきて、しんめいにもはなれたてまつり、きみにもすてられまいらせて、なみのうゑにうかぶおち人となれり。すでにりよはくにたゞよふうへは、ゆくすゑとてもたのしみあるべふもなければ、一じゆのかげにやどるも、ぜんぜのちぎりあさからず、一がのながれをくむもたしやうのゑんなをふかし。いはんやなんぢらは、一たんしたがひつくもんかくにあらず、るいそさうでんのけにんなり。あるひはついしんのよしみたにことなる事もあ

ついでしん追記。
臣(二本)がよい。(近

り、あるひはぢうだいのはうおんこれふかきもあり。かもんはんじやうのいにしへは、おんぱによつてわたくしをかへりみ、たのしみつきかなしみきたる。なんぞしりよをめぐらし、ぢうおんをむくひんや。十ぜんていわう、かたじけなくも三じゆのじんぎをたいしわたらせ給へば、いかならん野のすゑ、山のおくまでもぎやうがうの御ともつかまつらんとはおもはずやとの給へば、らうせうなみだをながし、あやしのとりにけだものも、おんをほうじとくをむくふ心みな候とこそうけたまはれ。なかにもきうせんばじやうにたづさはるならひ、ふた心あるをもつてはぢとす。此廿よねむがあひだ、さいしをはぐゝみ、しよじうをたくはゆる事、しかしながらきみの御おんにあらずといふ事なし。しかればすなはち日ぼんのほか、きかい、かうらい、天ぢく、しんだんまでも、ぎやうがうの御ともつかまつるべきよし、一みどうおんに申ければ、人々すこしいろをなをし、たのしくこそおもはれけれ。平家ふくはらのきうりに一夜をぞあかされける。おりふし秋の月はしものゆみはりなり。しんかうのそら夜しづかにして、たびねのどこのくさまくら、なみだもつゆもあらそひて、たゞものゝみぞかなしき。いつかへるべきとおおぼえねば、こにう道しやうこくのつくりをき給ひし、はるははな見のおかの御しよ、秋は月見のはまの御しよ、ゆきの御しよ、かやの御しよとて見られけり。ばゞどの、二かいのさじきどの、人々のいゑゝ、五でうの大なごんくにつなのきやうのつくりまいらせられしさただいり、いつしかみとせにあらはてゝ、きうたいみちをふさぎ、しうさうかどをとぢ、かはらにまつをひ、つたしげり、うてなかたぶひてこけむせり。まつかぜのみやかよふらん。すだれ

たえてねやあらはなり。月かげばかりやさしいりけん。あくればしゆじやうをはじめまいらせ
て、人々御ふねにめされけり。みやこをたちしばかりはなけれども、これもなごりはおしかり
けり。あまのたくものゆふけふり、おのへのしかのあかつきのこゑ、なぎさくによるなみの
をと、そでにやどかる月のかげ、ちぐさにすだくきりぐす、すべてめに見え、みくにふるゝ
事、一ツとしてあはれをもよをし、心をいたましめずといふ事なし。きのふはひがし山のせき
のふもとにくつばみをならべ、けふはさいかいのなみのうへに、ともづなをとく。うんかいち
んくとして、せい天まさにくれなんとす。こたうにきりへだゝつて月かいじやうにうかぶ。
きよくほのなみをわけて、しほにひかれてゆくふねは、なかぞらのくもにさかのぼる。しゆり
の大夫つねもりのちやくし、くはうごぐうのすけつねまさ、ぎやうがうにぐぶすとて、なく
くかうぞの給ひける。

みゆきするすゑもみやことおもへどもなおなぐさまぬなみのうへかな

平家は日かずをふれば、さんせんほどをへだてゝ、くも井のよそにぞなりにける。はるぐき
ぬるとおもふにも、たゞつきせぬものはなみだなり。なみのうへにしろきとりのむれあるを見
ては、かのありはらのなにがしが、すみだがはにてこととひし、なもむつまじきみやこどりか
などあはれなり。壽永二年七月廿五日、平家みやこをおちはてぬ。